

柏原市埋蔵文化財発掘調査概報

1989年度

1990年3月

柏原市教育委員会

はしがき

柏原市は大和川と石川が合流する大阪平野の南東部に位置し、市域のおよそ3分の2が山地や丘陵で占められています。都心からわずか20kmの距離にしては、山や川などの自然環境に恵まれ、府下でも有数の緑の豊かな町であります。

ここ柏原市では人々が生活を始めたその足跡は、旧石器時代からみられ稻作が伝來した弥生時代にはすでに人々は定住しており、豊かな風土に恵まれた当市は河内文化発祥の地でもあり、奈良の玄関口として栄えたのであります。

本市文化財行政も今日のように変化の激しい時代に対応し、遺跡調査によって文化財の保存及び遺跡の公有化を図ってまいりました。

その保存・保護の一環として高井田横穴群一帯を、3ヶ年計画で史跡高井田横穴公園として平成元年度より実施する事になり、文化財保護の理念を一步全うできたと信じているものであります。

また本年度も市内各所の遺跡発掘調査を実施し、数多くの成果を得て本書発掘調査報告書を作成したものであり、今後地域文化の礎石として役立つものと確信し、より一層文化財保護にご援助、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成2年3月31日

柏原市教育委員会

教育長 勃刀和秀

例　　言

1. 本書は、柏原市教育委員会が国事補助事業（総額4,000,000 円、国補助率50%、府補助率25%、市負担率25%）として計画し、社会教育課文化係が実施した柏原市内遺跡群緊急発掘調査概要報告書である。
2. 調査は、柏原市教育委員会社会教育課、竹下 賢、北野 重、安村俊史、桑野 幸を担当者とし、平成元年4月1日に着手し、平成2年3月31日に終了した。
3. 本書は、文化財保護法第57条の2に基づく届出があった225件のうち昭和64年1月1日から平成元年12月31日までに着手した、土木工事に伴う事前発掘調査の概要を記載している。
4. 調査の実施と整理にあたっては、下記諸氏の参加、協力を得た。

松井隆彦 空山 茂 山田寛顕 奥川滋敏 谷口京子 寺川 欽 蔡中優香
津田美智子 岡田嗣生 田中國雄 近藤孝雄 尾野知永子 寺尾正美
小西千賀恵 菊川秀樹 山川正裕 奥野 清 谷口鉄治 井上岩次郎
麻柴三郎 西岡武重 乃一敏恵 横関勢津子 吉居豊子 岡田久美

5. 本書の執筆は北野、安村が担当し、北野が編集した。
6. 本書で使用した標高と方位は、特に注記のない限りT. P.、磁北である。
7. 本調査に際して、写真、実測図を記録として残すと共に、カラースライドを作製した。また、出土遺物は、写真、実測図と共に当教育委員会、歴史資料館にて保管、展示を行っている。広く利用されることを願うものである。

目 次

はしがき

例言

目次

1989年度柏原市内遺跡群発掘調査一覧

1989年度柏原市内遺跡群立会調査一覧

第1章 山ノ井遺跡.....	1
89-2次調査.....	1
第2章 大槻遺跡.....	3
89-2次調査.....	4
第3章 太平寺遺跡.....	6
89-2次調査.....	6
第4章 安堂遺跡.....	8
89-2次調査.....	8
第5章 高井田廃寺.....	10
89-2次調査.....	10
第6章 烏取千軒遺跡.....	20
89-1次調査.....	20
第7章 玉手山遺跡.....	21
89-1次調査.....	22
第8章 田辺遺跡.....	41
89-3次調査.....	42
89-5次調査.....	44
89-6次調査.....	46
第9章 国分尼寺跡.....	48
89-1次調査.....	48

挿図目次

- 図-1 山ノ井遺跡調査地位置図
図-2 調査区位置図
図-3 トレンチ平面図・断面図
図-4 出土遺物
図-5 大塚遺跡調査地位置図
図-6 調査区位置図
図-7 トレンチ平面図・断面図
図-8 出土遺物
図-9 太平寺遺跡調査地位置図
図-10 平面図・土層図
図-11 出土遺物
図-12 安堂遺跡調査地位置図
図-13 調査区位置図
図-14 平面図・土層図
図-15 高井田庵寺調査地位置図
図-16 調査区位置図
図-17 遺構平面図・土層図
図-18 塔基壇雨落溝
図-19 磐石
図-20 出土遺物
図-21 出土遺物
図-22 出土遺物
図-23 平瓦叩き目
図-24 寛永通宝
図-25 烏取千軒遺跡調査地位置図
図-26 トレンチ断面図
図-27 玉手山遺跡調査地位置図
図-28 調査区位置図
図-29 山田1号墳平面図・断面図
図-30 上手山山田1号墳平板測量図
図-31 古墓全休図
図-32 火葬墓平面図・断面図その1
図-33 火葬墓平面図・断面図その2
図-34 上坑墓平面図・断面図
図-35 出土遺物(須恵器その1)
図-36 出土遺物(須恵器その2)
図-37 出土遺物(土師器その1)
図-38 出土遺物(土師器その2)
図-39 出土遺物(土師器その3)
図-40 出土遺物(埴輪)
図-41 出土遺物(鉄製品)
図-42 出土遺物(銅鏡)
図-43 田辺遺跡調査地位置図
図-44 トレンチ平面図・断面図
図-45 出土遺物
図-46 調査区位置図
図-47 平面図・土層図
図-48 出土遺物
図-49 調査区位置図
図-50 出土遺物
図-51 平面図・土層図
図-52 国分尼寺跡調査地位置図
図-53 調査区位置図
図-54 平面図・土層図
図-55 銅製品
図-56 瓦

1989年度 柏原市内遺跡群発掘調査一覧

遺跡名	所 在 地	面 積 m ²	申 請 者	用 途	想 当	調査期日	備 考
明神山古墳群89-1	国分東条町3609番地	1856.38	鶴山チユ	墓地造成	安村	1.26	遺構・遺物なし。
田辺89-1	田辺1丁目1321-1	142.15	浅田順三郎	鉄骨平家	安村	2.2 ~ 2.4	1×5mのトレンチ設定し遺構・遺物なし。
玉手山89-1	玉手町145-8	1195	長谷川猪	3階建集合住宅	北野	2.6 ~ 3.30	本査掲載
太平寺安置89-1	安来町698-11	95.96	(株)日興建設 (代)三木武夫	木造2階建	北野	2.13	3.5×3.5mのトレンチ設定し遺構・遺物なし。
玉手山89-2	玉手町301-1の一部	111.55	北田春秋	鉄骨新築	北野	2.27	2×1.3mのトレンチ設定し遺構・遺物なし。
大森89-1	大森3丁目151番4	930.68	山下武次	共同住宅	北野	3.4	遺構・遺物なし。
松岳山古墳群89-1	国分南町1丁目3109-54,56	214.40	古村正義	木造2階建	安村	3.10	遺構・遺物なし。
玉手山1号墳89-3	玉手町14-19	60	山西敬一	学術調査	桑野	3.15 ~ 3.30	墳丘範囲確認。
大森89-2	平野2丁目283	74.45	児玉栄一	木造2階建	北野	4.13 ~ 4.15	本査掲載
平尾山古墳群89-2	藤多尾塚836番地外19筆	16094	全農宇園	グランド酒店	安村	4.24 ~ 5.8	1×50mのトレンチ設定し遺構・遺物なし。
松岳山古墳群89-2	国分山第1丁目3108-7	589.31	前田繁太郎	専用住宅	北野	4.28	3ヶ所のトレンチ設定し、遺構・遺物なし。
田辺89-2	国分本町6丁目11-14	880	山西敬一	国分小学校改築	北野	5.1 ~ 6.1	古墳・江戸時代の住居遺構を検出。鉄棒・鐵骨が出土。
山ノ井89-1	山ノ井町693番地	253.99	中山真治	貯蔵住宅	北野	5.15	2×2mのトレンチ設定し遺構・遺物なし。
大世89-3	平野1丁目112-1	619.43	西尾政治	共同住宅	安村	5.22	2×2mのトレンチ設定し遺構・遺物なし。
松岳山古墳群89-3	国分本町5丁目1519	75.45	佐藤庸	鉄骨2階建	安村	6.6	1×1mのトレンチ設定し遺構・遺物なし。
高井田魔寺89-1	高井田146番3地	950	土地開発公社 理事長山西敬一	駐車場	安村	6.28 ~ 7.25	中世の石積基礎を検出。瓦、屋根輪が出土。
木越89-1	木越3丁目766-3	519.23	金田守	新築工事	北野	7.10	2×3mのトレンチ設定し遺構・遺物なし。
平尾山古墳群89-3	藤多尾塚2736-1,2729	1437	家田繁	農地整地	北野	7.24 ~ 7.26	2×30mのトレンチ設定し遺構・遺物なし。
高井田魔寺89-2	高井田88-1番地	10280	辻野幹雄	建物基礎	安村	7.31 ~ 8.22	本査掲載
鳥取千軒89-1	青谷601-3	958.42	富士蛇	木造2階建	北野	8.10	本査掲載
玉手山89-4	池ヶ丘2丁目365番37	280.36	尼丁忍雄	鉄骨2階建	安村	8.22	遺構・遺物なし。
松岳山古墳群89-4	国分本町5丁目1522-1	251.43	岸田龍太郎	木造2階建	北野	8.31 ~ 9.5	3×5mのトレンチ設定し青瓦を検出。
山ノ井89-2	山ノ井町369-1	392.06	高井孝	木造2階建	北野	9.16	本査掲載
本郷89-2	木郷3丁目744番1,745番1	600	山西敬一	福祉センター	安村	9.18 ~ 9.21	地表下5mで、引人和川の洪水跡を検出。

遺跡名	所在地	面積 a	申請者	用途	担当	調査期日	備考
田辺89-3	国分本町6丁目763-8の一部	88.03	上野達	木造2階建	北野	10.4~10.6	本善指標
田辺89-4	国分本町6丁目763の一部	107.54	古河清生	木造2階建	北野	10.7	1×3mのトレンチ設定し遺構・遺物なし。
大県郡桑至遺構 89-4	法善寺2丁目 168-1,169-2	915.35	中井繁太郎	鉄筋コンクリート 7階	北野	10.17	2×2mのトレンチ設定し 遺構・遺物なし。
国分尼寺跡89-1	国分東条町2566	134.75	上田義男	軽量鉄骨2階建	安村	10.19	本善指標
船橋89-2	吉野地先	9800	大和川工事事務所	護岸工事	北野	10.27	遺構・遺物なし。
太平寺89-2	太平寺2丁目304	181.75	高井利作	木造2階建	安村	11.6	本善指標
田辺89-5	田辺2丁目2072番地	496.60	鶴山清造	倉庫	安村	11.27~11.30	本善指標
田辺89-6	田辺1丁目5-19	251.43	奥井仁	専用住宅	安村	12.1~12.15	本善指標
安堂89-2	安堂町615-2	231.40	山下寛良夫・優香	木造2階建	安村	11.14	本善指標
高井89-1	安堂町	424	関西電力 高岡和男	送電用鉄塔	安村	11.20	土師器、須恵器が出土。
田辺89-7	田辺2丁目2100-1,3	329	喜田敏	RC造施設の築造	安村	11.9	2×2mのトレンチ設定し 遺構・遺物なし。
田辺89-8	国分巾堀1丁目1687番地	511.875	藤谷博尚	鉄骨造 平家	北野	11.10	2×2mのトレンチ2ヶ所 設定し、遺構・遺物なし。
平尾山古墳群89-4	樅多尼86338	3590	KDD 石井多加三	マイクロ中継所	安村	12.5~12.28	古墳2基を検出。
玉手山89-5	円明町1-1	2187.545	山西敏一	幼稚園増築	北野	12.18~12.22	1×2mのトレンチ設定し 遺構・遺物なし。

1989年度 柏原市内遺跡群立会調査一覧

遺跡名	所在地	面積 a	申請者	用途	担当	調査期日	備考
船橋	大正11日613	42.73	尾野文男	鉄骨3階	安村	3.22	遺構・遺物なし。
原山	池ヶ丘3丁目1074	152.88	弓橋勘次	住宅	安村	4.3	遺構・遺物なし。
太平寺発掘	太平寺2丁目	59.6	柏原市水道局	水道	安村	5.25	遺構・遺物なし。
太平寺	太平寺1丁目135-1,2,3,4	675.675	幸牛建設 木村輝	分譲住宅	安村	6.14	遺構・遺物なし。
玉手山	円明町745-1	383.43	吉本工芸社	倉庫	北野	9.8	遺構・遺物なし。
石川町遺跡包蔵地	石川町2番地先	50	柏原市下水道部	下水道	安村	10.9~10.19	遺構・遺物なし。
玉手山	円明町	57.5	柏原市水道局	水道	北野	10.16~10.21	遺構・遺物なし。
平尾山古墳群	青谷100	306.08	所沢泰太郎	住宅	北野	11.10	遺構・遺物なし。
高井田開寺	高井田60-45	71.67	吉岡喜人	個人住宅	安村	11.13	遺構・遺物なし。

第1章 山ノ井遺跡



図-1 山ノ井遺跡調査位置図

89-2次調査

- ・調査地区所在地 柏原市山ノ井599-1
- ・調査担当者 北野 重
- ・調査期間 1989年9月16日
- ・調査面積 $2.0\text{m}^2 / 392.05\text{m}^2$

当調査地は、東高野街道(旧国道170号線)と葉平道の間に挟まれた山ノ井遺跡の中心部にあたる西向きの緩斜面地である。個人住宅建築に伴う事前の発掘調査である。周辺部の調査があまり行われていないので部分的な確認調査を実施した。

トレンチは、調査区の南側に $1 \times 2\text{ m}$ の規模で設定した。層位は、上層から次の通りである。1層は、盛土。2層は、茶灰色砂質土である。3層は、灰褐色砂質土である。2、3層はぶどう畑の耕作土である。4層は、地表下約50cmで検出

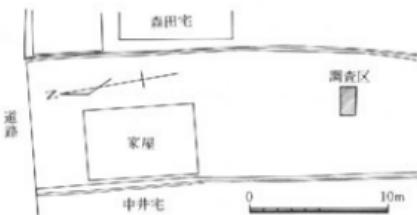


図-2 調査区位置図

した弥生時代から古墳時代にかけての遺物包含層で厚さ20~30cmを測る。この土層は、さらに2~3層に分層が可能である。6層は、灰青色砂質土である。湧水が激しいので20cm掘削した段階で中止したがさらに続くものと考えられる。この土層は、牛駒山地の丘陵上から流れ出た花崗岩の風化土が多く含まれ堆積したものである。

遺構は、狭い範囲で確認されなかつたが周辺地域にも同様の遺物包含層が拡がり集落址が存在し、将来多くの遺構が検出されるだろう。

遺物は、3、4層から土師器、須恵器、弥生土器が出土した。時期は、弥生時代後期、古墳時代前期、同後期が中心である。実測したものについて説明を加えたい。

1は、小型丸底壺の口縁部である。口径10.2cm、口縁部長3.8cmである。口縁端部は、薄く尖り気味に終わり、内外面丁寧な磨きが施されている。作りは薄手でややシャープなところが少ない。色調は、薄茶灰色で胎土は精良である。時期は、庄内ではあるが布留式に近いかもしれない。

2は、高杯の杯部である。口径15.2cm以上、杯部高5.0cmを測る。水平な底部に逆八の字状の口縁が付き、口縁端部は欠損している。脚部は、杯部との接合部で分離しているが、接合部分があまり肥大でなく簡素である。調整は、摩耗が激しく不明な点が多いが、胎土中の砂粒の移動痕跡から板ナデ又はヘラ削りしているようである。色調は、明茶灰色。胎土は、石英、長石、くさり礫を含んでいる。

3は、口径13.4cm布留式甕である。口縁部内側を強くヨコナデし端部を肥厚させている。この土器も遺存状態が悪く調整は明確でない。恐らく板ナデ調整が施こされていると考えられる。色調は、灰白色。胎土は、石英、長石、くさり礫等を多く含む。器壁は、やや薄く仕上げている。

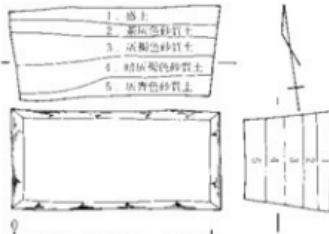


図-3 トレンチ平面図・断面図

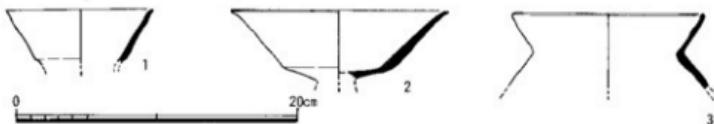


図-4 出土遺物

第2章 大県遺跡



図-5 大県遺跡調査地位置図

89-2次調査

- ・調査地区所在地 柏原市平野2丁目283
- ・調査担当者 北野 重
- ・調査期間 1989年4月13日～4月15日
- ・調査面積 $4.8\text{m}^2 / 74.48\text{m}^2$

当調査地は、大県遺跡の北東部の生駒山地の麓に位置し、東側は、急な丘陵斜面となっている。個人住宅建築に伴う事前の調査である。地形は、北側に水平面があるが、南及び西側は緩斜面となっている。

調査は、 $1.2 \times 4.2\text{m}$ のトレンチを東側に設定した。土層は、上層から、1層が、約50cmの盛土。2層は、灰褐色砂質土である。厚さは、約50cmを測る。この土層除去後南北方向の排水溝を検出した。近年まで存在していたらしい。3層は、薄茶灰青色砂質土で溝の埋土である。4層は、茶灰色粘質土で、奈良時代の遺物包含層である。埋土中薄い砂層もありさらに分層が出来る。この土層下より検出した溝状の落ち込みは、北東から南西方向に傾斜して浅い谷筋に続いている。溝の上層から検出した遺物は、北側から廃棄されたものであろう。5層は、暗青灰色粘質土である。遺物が弥生時代後期から古墳時代前期の遺物が出土した。

遺物は、落ち込み上層から出土したものだけが実測出来た。1～4は、須恵器である。1は、口径13.2cm、器高2.4cmである。天井の中央部に擬宝珠様つまみを付け、口縁端部はほぼ水平な天井から垂直下方に折れ曲がり端部を丸く仕上げている。色調は、青灰色で焼成は良好である。2は、口径17.5cm、器高3.75cmの杯蓋である。中央部に擬宝珠様つまみを付け弓状の天井部を成している。口縁端部は肥厚している。天井部は、回転ヘラ削りを行っている。色調は、淡青灰色で焼成はやや甘い。3は、口縁部を欠損している。擬宝珠様つまみは扁平な感じがなく中央部が高く、口縁端部に返りが遺る形態のものであろう。4は、摘みが欠損している。扁平な天井部を持ち、口縁端部を下方に小さく肥厚させる。5は、口径14.8cm、器高3.8cmの土師器の杯である。体部にやや丸味があり、口縁端部は丸

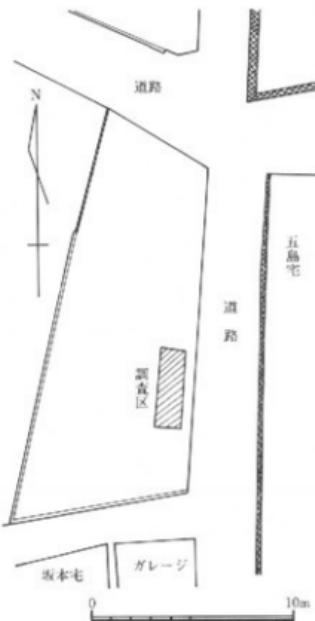


図-6 調査区位置図

く終わり、底部は小さな高台を体部と底部の境に付ける。内外面は遺存状態が悪く調整は不明であるが丁寧な造りである。色調は、薄橙茶色。胎土は、石英、長石、金雲母、くさり礫を含む。6は、口径12.6cm、器高3.1cmの杯身である。口縁端部は外反気味に終わる。

内面は剥離が激しいがヘラ磨きが施されている。7は、口径13.7cmの杯身である。口縁端部内面に段を持つ。8は、口径12.4cmのやや厚手の杯である。口縁端部は、内傾する面を持ち、底部はナデ調整である。9は、口径13.4cm、器高2.8cmの灯明皿である。口縁部に3ヶ所の2次焼成痕がある。内面に放射状暗文がある。また、内底面にヘラ先で傷を付けた痕跡が多くみられる。

10は、口径13.0cmの杯である。口縁端部外面に1形状の凹線がある。内外面は、暗文とヘラ磨き調整が施されているがほとんど摩耗している。11は、口径20.8cmの杯である。口縁端部を内側に折り曲げたもので、内面に放射線状の暗文を施している。仕上げは丁寧である。12は、壺の口縁部であろう。口縁端部は、内側に肥厚し上方に平坦な面を持っている。内外面ナデ調整であるが部分的にハケ目痕が見られる。これらの遺物は、8世紀前半の時期の遺物である。

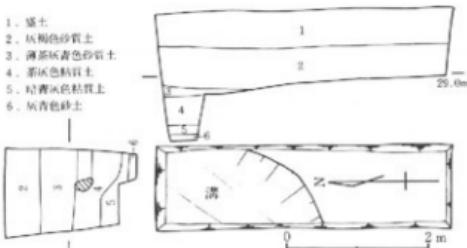


図-7 トレンチ平面図・断面図

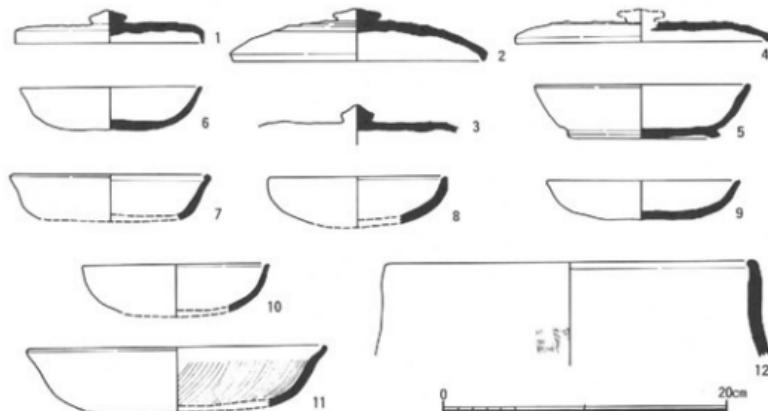


図-8 出土遺物

第3章 太平寺遺跡



図-9 太平寺遺跡調査地位置図

89-2次調査

- ・調査地区所在地 柏原市太平寺2丁目394
- ・調査担当者 安村俊史
- ・調査期間 1989年11月6日
- ・調査面積 $4\text{ m}^2 / 181.75\text{ m}^2$

調査地は西へ下る斜面地に位置し、調査地中央に2m四方の調査区を設定した。建物基礎深度が40cmであるため、約50cmまで掘削したが、少量の近世、近代の磁器片がみられるのみで、良好な遺物、遺構は認められなかった。そのため、東壁際に幅約70cmのトレンチを設定し、更に掘り下げた。その結果、地表下70cmで厚さ約10cmの遺物包含層に達し、その直下で地山と考えられる褐色砂質土に至った。褐色砂質土上面は緩やかに西へ下っているようであり、トレンチが狭小であるため、遺構は確認できなかったが、調査地周辺には、遺物包含層と共に遺構が存在するものと思われる。褐色砂質土上面の高さはT. P. 21.8~21.9m、遺物包含層上面の高さはT. P. 22.0mである。

土層は第2層褐色土が近代の家屋建築に伴う盛土、第3層灰褐色砂質土が近世の耕作土、第4層黒褐色粘質土が古墳時代から中世にかけての遺物包含層である。図示した遺物は、すべて黒褐色粘質土から出土した遺物である。

1は須恵器杯身。口径12.0cmを測る。2は土師器の甕。口縁部は強いヨコナデを施し、端部は面をなす。体部内面はヨコ方向の板ナデ。3は土師器の小皿。ほぼ完形であり、口縁の一部に煤が付着することから、灯明皿として使用されたと考えられる。

4～6は平瓦。すべて外面に繩タタキ目、内面に布目がみられる。6の外面の繩目は、ケズリ、ナデによって一部スリ消されている。桶型の枠板痕が見られないこと、横断面が弧をなさないこと、側面の角度等から、すべて一枚作りと考えられる。

黒褐色粘質土からは、このように古墳時代から中世の遺物が混在した状態で出土している。

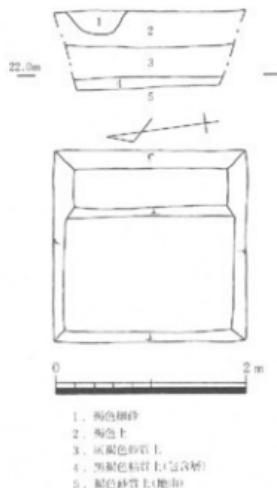


図-10 平面図・土層図

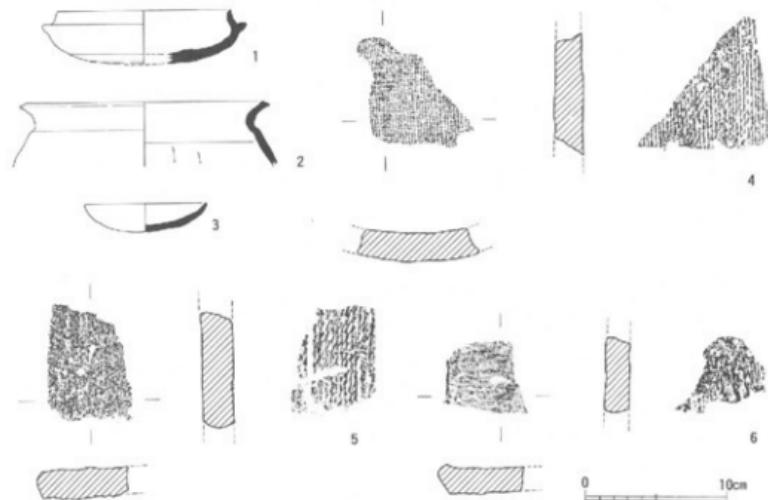


図-11 出土遺物

第4章 安堂遺跡



図-12 安堂遺跡調査地位置図

89-2次調査

- ・調査地区所在地 柏原市安堂町615-2
- ・調査担当者 安村俊史
- ・調査期間 1989年11月14日
- ・調査面積 $4 \text{ m}^2 / 231.40 \text{ m}^2$

調査地は、東から西へ派生する尾根筋の南斜面に位置する。したがって、全体の地形は西、南へ緩やかに下っている。調査地北側の道路は、この尾根を切り込んで作られており、調査地周辺も、かなり削平されていると予想された。しかし、調査結果から、比較的良好な状態で遺物・遺構が残っている可能性が高いため、ここに報告し、今後の周辺地域での調査の参考に供したいと考えている。



図-13 調査区位置図

調査区は、調査地の南西部に2m四方で設定した。約60~70cmまで掘削したが、少量の土師器・須恵器が出土したのみであり、良好な遺物や遺構は認められなかった。また南東部は大きく搅乱されているため、西壁際に幅60cmのトレンチを設定し、90cmまで掘り下げた。

その結果、第5層黒褐色粘質土が、比較的良好な遺物包含層であることが確認できた。

上層は表土・盛土下で、北東部にのみ灰褐色砂質土がみられる。これは近世頃の耕作土と考えられる。第4層褐色砂質土には、少量の土師器・須恵器小片が含まれており、第5層黒褐色粘質土からは土師器・須恵器片が出土している。図化可能な遺物は存在

しないが、6世紀末葉頃の短い立ち上がりを有する須恵器杯身片があり、他の遺物も、この時期の前後に位置づけられると思われる。黒褐色粘質土は北東部でT. P. 31.5mと最も高く、南西部でT. P. 31.1mと最も低くなる。なお、黒褐色粘質土より下層の状況は確認できていないが黒褐色粘質土の厚さは20cm以上である。

調査結果を基に、届出者、施工業者と協議した結果、建物基礎深度を予定より浅くし、地表下30cmまでとすることで合意に達した。地表下30cmまであるならば地下の遺物包含層に影響が生じるとは考えられないため、調査範囲を拡張せず、工事に際して立ち会うことにして、工事の着手を認めた。工事に際しての立ち会いの結果、遺物・遺構は発見されていない。

当調査地で、6~7世紀頃の遺物包含層を確認できたことは、安堂遺跡の東限が更に東へ拡がっていることを示しており、今後の周辺地域の調査に注意しなければならない。

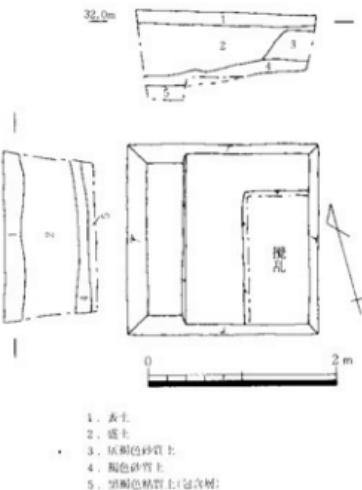


図-14 平面図・土層図

第5章 高井田廃寺



図-15 高井田廃寺調査地位置図

89-2次調査

- ・調査地区所在地 柏原市高井田88-1
- ・調査担当者 安村俊史
- ・調査期間 1989年7月31日～8月22日
- ・調査面積 $72\text{m}^2 / 10, 280\text{m}^2$

式内社天湯川田神社の拝殿建て替えに伴う調査であり、1961年に拝殿南側の境内で、塔の基壇が確認されている。基壇の推定復元によると、基壇北辺が現在の拝殿下に位置することになるのだが、その調査の際に、拝殿下に設定されたトレンチによって拝殿下の基壇北辺が完全に削平されていることが報告されている。今回の調査では塔基壇の残存状態を確認し、瓦等の採集を行うことを目的として実施した。調査に際して、辻野幹雄氏から資料提供等の協力を得た。記して感謝する。

調査は、新拝殿の予定地ほぼ全域を調査区として実施した。調査の結果、旧拝殿に伴う遺構や遺物と共に、塔基壇東辺の雨落溝の一部と、大量の瓦が出土している。

東辺の雨落溝は、調査区の南東部、東の駒大に接する部分で検出された。長さ30cm前後、幅20cm前後、厚さ4cm前後の安山岩板石を立てて側辺としたものであり、東壁に3石が残っていた。雨落溝は、暗赤褐色土の地山上に黄褐色粘質土を盛り、それを掘り込んで築かれている。一部を断ち割ったところ、板石を東壁に接して垂直に立て、その内側下部を安山岩で押されたものであった。確認した長さは67cm、西側の板石が残っていないため、雨落溝の幅は不明であるが、浅い段をなす部分を西壁と考えると約30cmの幅となる。北側は後世の削平を受けている。

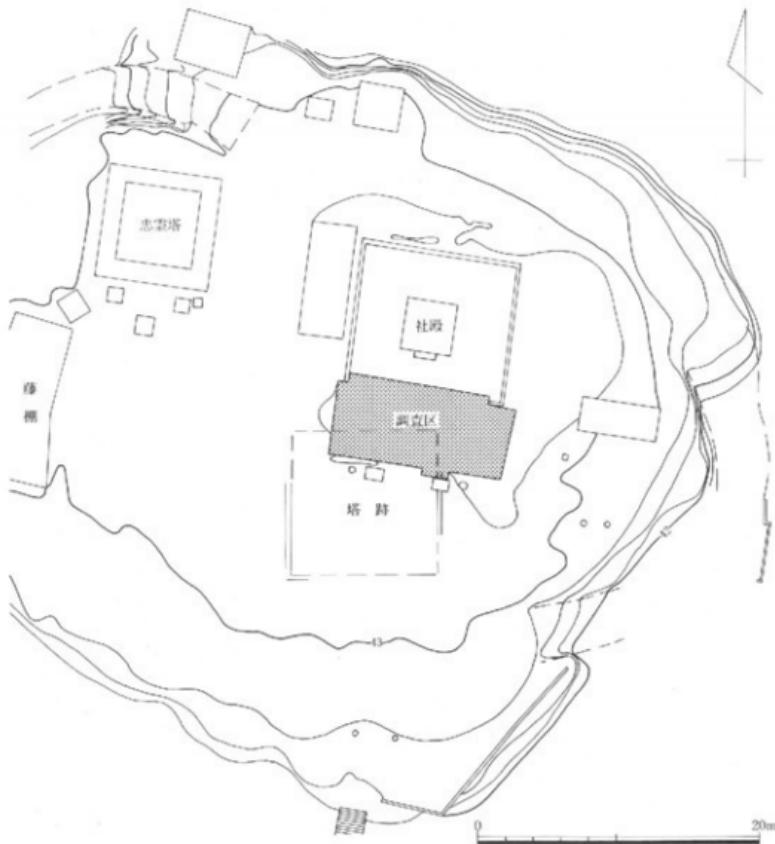


図-16 調査区位置図

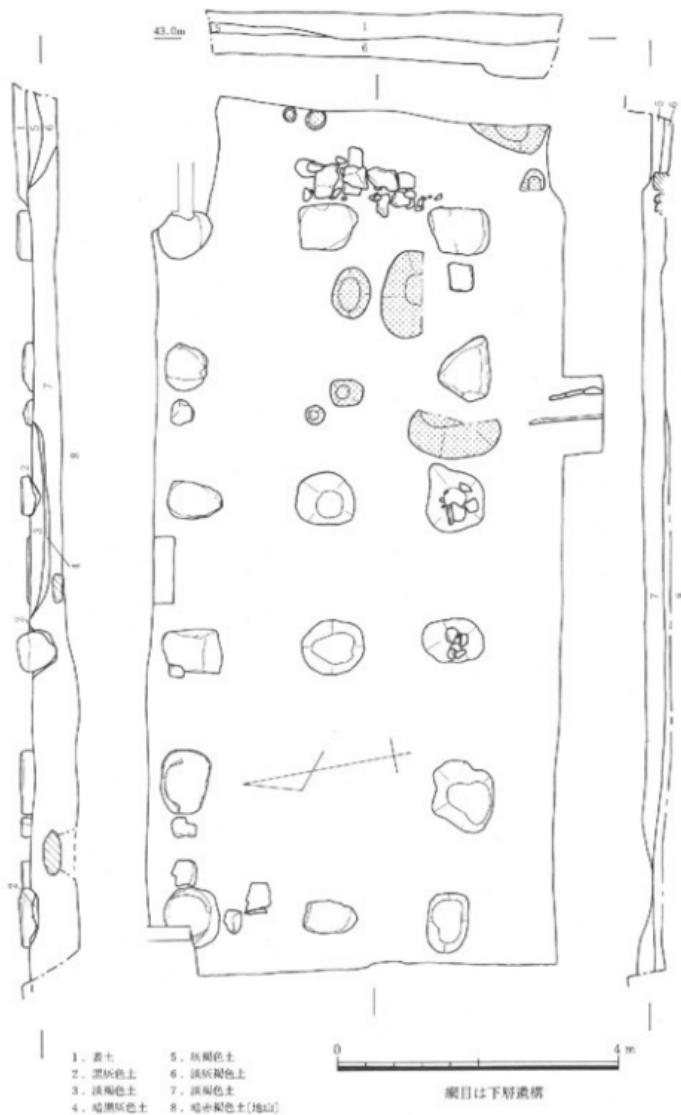


図-17 遺構平面図・土層図

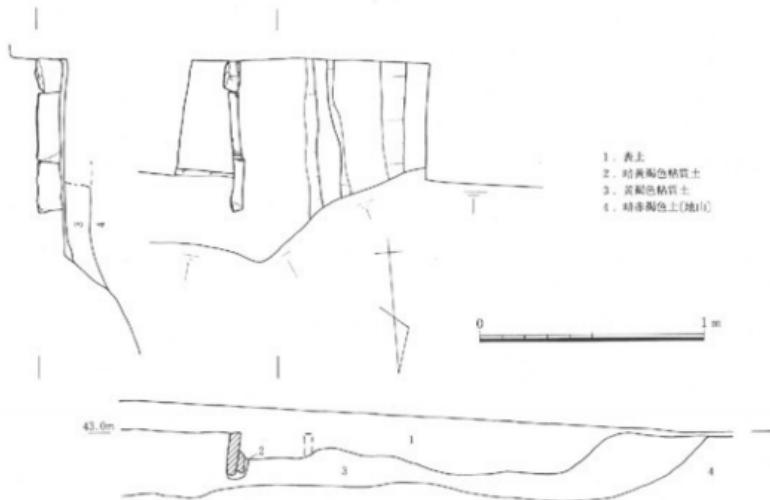


図-18 塔基壇雨落溝

1961年の調査時の平面図には、西壁の板石も残存しているように描かれているが、今回の調査では残存していなかった。また、雨落溝の幅が約40cmとされていることから、推定西壁のやや西側にみられる浅い溝状遺構が板石の抜き取り痕であり、幅は40cm前後であったことも考えられる。いずれにしても、西壁の板石抜き取り痕は確認できなかった。東壁板石の残存状態から考えると、抜き取り痕は残っているはずであるが、精査の結果も確認できなかった。それと共に、溝底面には玉石が敷かれているということであるが、これも残存していなかった。

雨落溝の北側では、黄褐色粘質土、地山の暗赤褐色土が大きく削平されており、塔に関連する遺構は認められない。調査区南東部では、削平された地山面でピット、土坑が検出された。瓦片を出土する土坑もみられるが、遺物の量は少なく、時期を確認できない。性格も不明である。

これに続く遺構として、基壇状の盛土遺構がみられる。調査区東端近くに凝灰岩の集積がみられ、この位置を東端とし、西側に盛土されているものである。凝灰岩は加工面をもつ脆いものであり、塔基壇に使用されていたものと考えられる。盛土内には塔に伴うと考えられる瓦と共に鎌倉時代の瓦が多量に含まれている。従って、この盛土がなされた時期は鎌倉時代以降と考えられる。盛土の東辺の一部にのみ見られる凝灰岩の集積は、階段の位置に当たるものかもしれない。この基壇状の盛土に伴う柱穴等の遺構は見られない。しかし、盛土外東側の淡灰褐色土から瓦質鉢など15世紀頃の遺物が出土しており、その1点が室町時代にあったと考えら

れる。また、北辺中央で検出された長さ48cm、厚さ15cmの凝灰岩板石も、この時期のものと考えられる。この凝灰岩は良質のものであり、塔基壇の凝灰岩とは異なるものである。

その後、周辺が整地され、ほぼ現在の地形になったと考えられる。そして、礎石を伴った拝殿が建てられたのであろう。礎石に接して寛永通宝が9枚出土しており、18世紀頃と考えられる瓦が出土していることから、建立は江戸時代と考えられる。2間×3間、約3.8m×9.8mの規模の建物と推定され、中央の1間が通路であったと考えられる。礎石の上面はT. P. 43.3m前後、礎石間の壁を受ける部分にも扁平な石が敷かれていたようである。

それ以後、この建物を踏襲する拝殿が建てられ、現在に至ったと考えられる。なお、西側の駒犬には天保15年(1844)の銘が刻まれている。

この拝殿に使用されていた礎石、また周辺に存する石の中に、塔の礎石を転用したと考えられるものがあるため、ここで報告しておく。

1は、北西隅の礎石である。85cm×80cmの大きさであり、上面に円形の造り出しがあり、壁を受ける凸状に突出した部分がみられる。礎石の周囲は転用の際にかなり打ち欠かれており、特に底部の打ち欠きが激しい。石を軽くするために、打ち欠いたものであろう。

2は、北辺の西から2石目の礎石である。上面に円形の造り出しがみられ、対向する2方に凸部がみられる。

3は、社殿東側の山王権現社の石垣に使用されている礎石である。やはり円形の造り出しがみられ、周囲は打ち欠かれている。いずれも、円形の造り出しある直径約55cm、高さ約2cmを測り、塔の礎石と考えられるものである。

出土遺物の大半は瓦であるが、その他の遺物も少量見られる。1は円筒埴輪の体部と考えられる小片であり、凸帯の突出は高い。2は土師器の口縁部と考えられるが小片であり、詳細は不明。埴輪、土師器蓋はいずれも1点のみ出土している。3・4は土師器小皿。5・6は瓦質の擂鉢。底部は平底、口縁は次第に厚味を増して、端部断面が三角形状を呈する。内面には六本一單位のオロシ目、外面はヘラケズリ調整である。

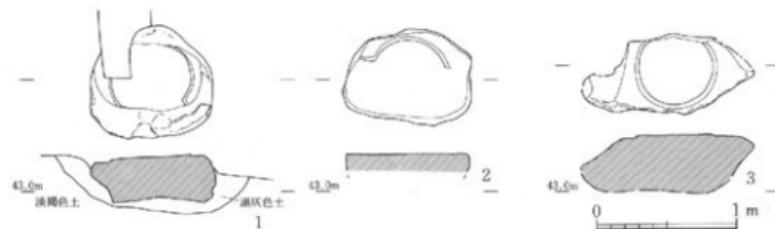


図-19 紋石

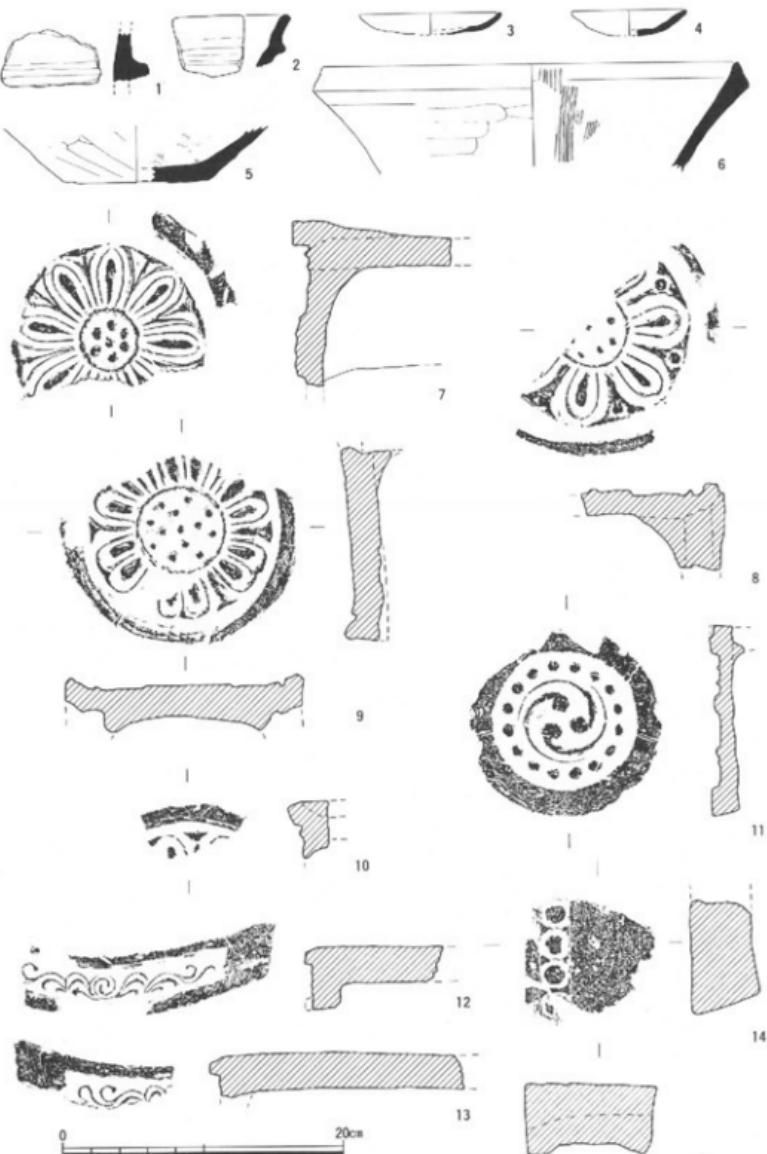


図-20 出土遺物

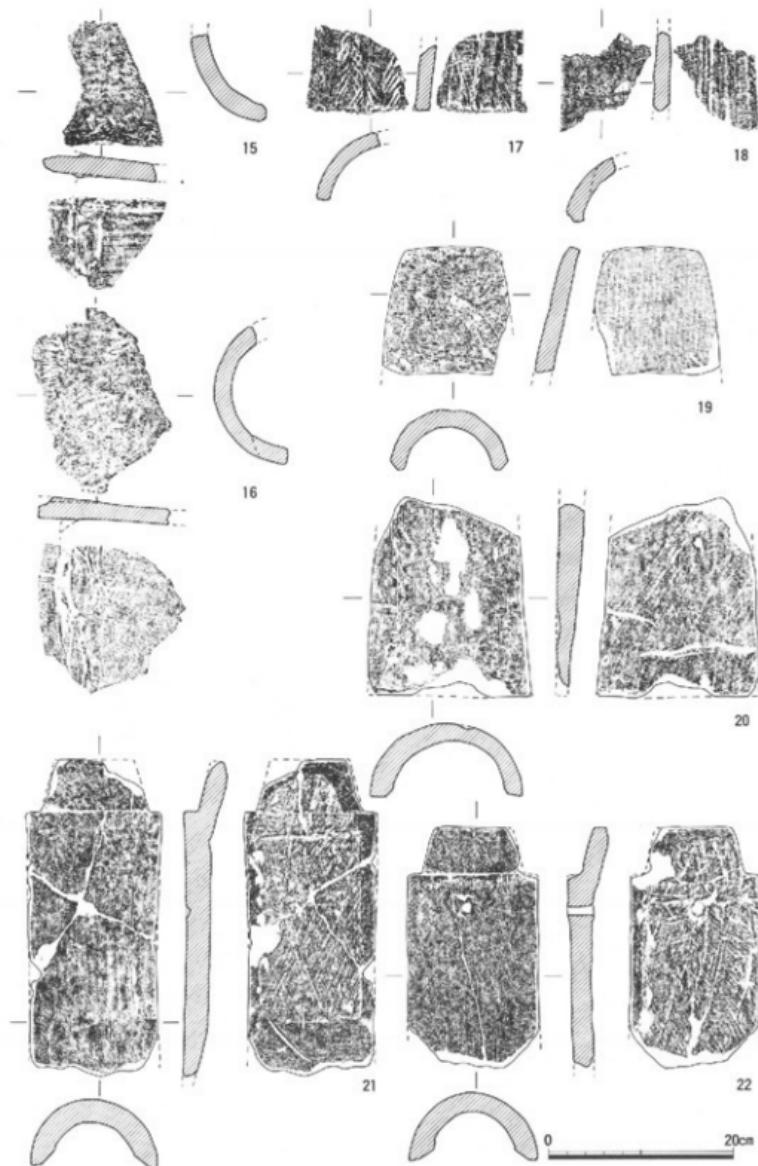


図-21 出土遺物

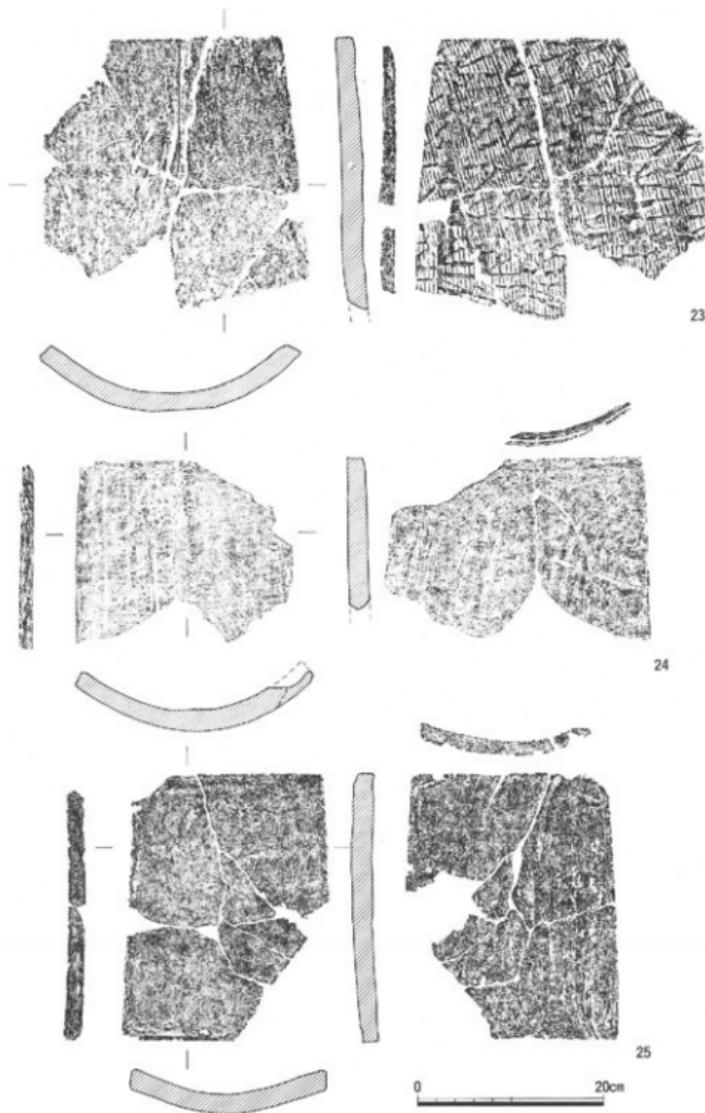


図-22 出土遺物

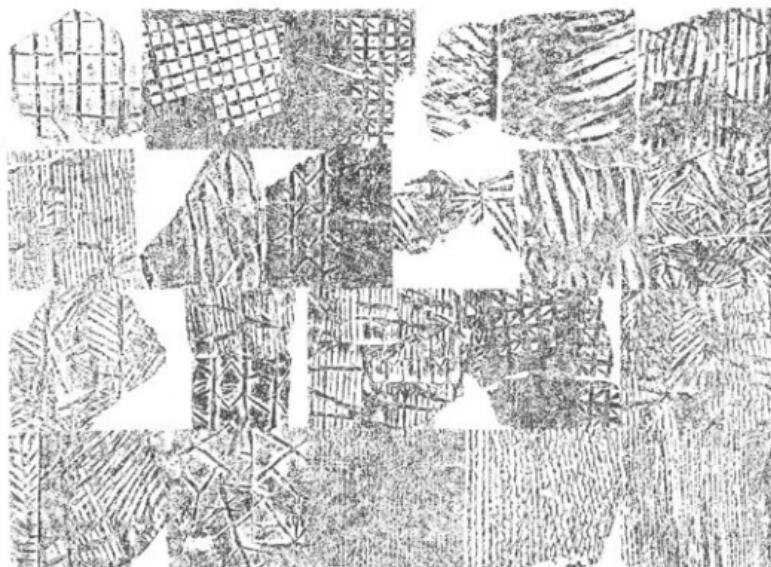


図-23 平瓦叩き目

7～11は軒丸瓦。7は単弁八弁蓮華文軒丸瓦。弁は重弁となり、子葉は細く長い。中房は直径3.7cm、1+6の蓮子を配する。外区は幅1.7cmの素文縁である。丸瓦部は凸面をヘラケズリし、瓦当に深く挿入され、凸面、凹面両側に粘土を補充する。凸面タテ方向のヘラケズリ、凹面はナデで仕上げる。鳥坂寺VI形式である。8は単弁七弁蓮華文軒丸瓦。弁は重弁となり、幅の広い間弁は中房に達し、弁を圓線状に取りまく。間弁先端に半球形の珠文が配される。中房の蓮子は1+8と推定される。外区は幅0.9cmの素文であり、外区凸面側で、段をなす部分が見られる。丸瓦は瓦当裏面に浅く挿入され、凸面、凹面両側に粘土が補充される。鳥坂寺VII型式に対応し、原山廃寺から同型の軒丸瓦が出土している。9・10は複弁六弁蓮華文軒丸瓦。中房には1+4+8の蓮子が配され、外区は素文である。丸瓦は瓦当裏面に浅く挿入され、凸面、凹面両側に粘土が補充される。鳥坂寺X型式に対応する。11は左巻きの三ツ巴文軒丸瓦。周縁に16個の珠文が配され、瓦当部は薄い。丸瓦部剝離痕から、丸瓦との接合は、瓦当と丸瓦端面の両側にキザミ目を入れ、瓦当上端に接合し、凹面側にわずかに粘土を補充していることがわかる。江戸時代中期頃であろう。

12、13は均整唐草文軒平瓦。12の中心飾は左まわりに尾部が長くのびる二ツ巴である。唐草はどちらも細く、緩やかに巻きこみながらのびる。外区は素文。頭は短頭の有段である。鎌倉時代と推定される。14は、鬼瓦の下部の破片である。



図-24 寛永通宝（原寸）

15、16は、瓦当部の剥離した軒丸瓦の丸瓦部である。15は広端面の凸面、凹面両側をヘラケズリし、16は凸面側のみヘラケズリする。16の凸面にはC-4類と思われる平行叩き目がわずかに残されている。

17~22は丸瓦。17は有軸綾杉(B-3類)、18は平行(C-4類?)、19、20は3本/cmの繩目叩きを施し、丁寧にナデ消している。19は行基式である。21、22は玉縁式の丸瓦。凸面は4本/cmの繩叩き目をナデ消し、凹面は布目を粗いケズリによって消しており、22には糸切り痕が残る。凹面の広端縁、側縁、玉縁部はいずれもヘラケズリされている。22には外面から穿孔された釘穴がある。12、13の軒平瓦に対応する時期の丸瓦と推定される。

23~25は平瓦。23は平行叩き(C-4類)を凸面全面に施し、側面は分割破面と共に載面もヘラケズリによって調整する。24は繩叩きをケズリ、ナデによって消している。側面は丁寧なヘラケズリ調整。24には粘土板の維ぎ目、布の合わせ目が見られる。23、24共に桶巻四枚作りである。25は黒灰色を呈する長辺29.1cmの平瓦。凸面はタテ方向のヘラケズリ。ナデによって仕上げ、糸切り痕が残る。凹面はタテ方向のナデによって仕上げる。一枚作りであり、21、22の丸瓦に対応するものであろう。

高井田廃寺出土の平瓦には多数の種類の凸面叩きが見られる。今回の調査でも、過去に報告されていない平瓦叩き目が見られ、これについては稿を改めて報告したいと考えている。

また、奥田尚氏に鑑定を依頼した結果、雨落溝に使用されている板石は芝山産のカンラン石安山岩、基壇状の盛土遺構内から出土した板石には猪名川上流産の流紋岩が見られる。大半は安山岩であるが、流紋岩が数点出土している。流紋岩が使用された時期、用途は不明である。塔基壇に使用されていたと考えられる凝灰岩は牡丹洞採取の流紋岩質凝灰角礫岩であり、片山廃寺塔基壇、安堂5支群16号墳、6支群3号墳の石棺材や石室敷石と同種のものである。

参考文献

大阪府教育委員会『河内高井田・鳥坂寺跡』大阪府文化財調査報告書第19輯 1969

第6章 鳥取千軒遺跡



図-25 鳥取千軒遺跡調査位置図

89-1次調査

- ・調査地区所在地 柏原市青谷601-3
- ・調査担当者 北野 重
- ・調査期間 1989年8月10日
- ・調査面積 $2\text{ m}^2 / 268.42\text{ m}^2$

当調査区は、鳥取千軒遺跡の中心部にあたり、旧奈良街道が走るやや丘陵上方寄りの場所に位置している。個人住宅建築に先立って調査を実施したところ、地表下約1mで古墳時代から中世にかけての遺物包含層を確認した。当遺跡では遺構及び遺物がほとんど確認されておらず報告をしておきたい。基本土層は、1～4層が耕作土で、5、6層は、中世の遺物が出土した。7層は、5～10cm大礫を多く含み土師器、須恵器が出土した。恐らく集落址が存在するのだろう。調査は、基礎が浅いためトレンチだけでとどめた。

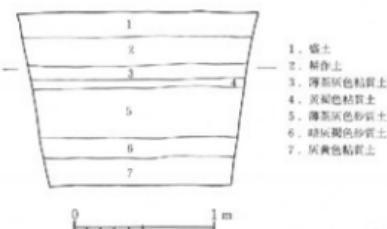


図-26 トレンチ断面図

第7章 玉手山遺跡

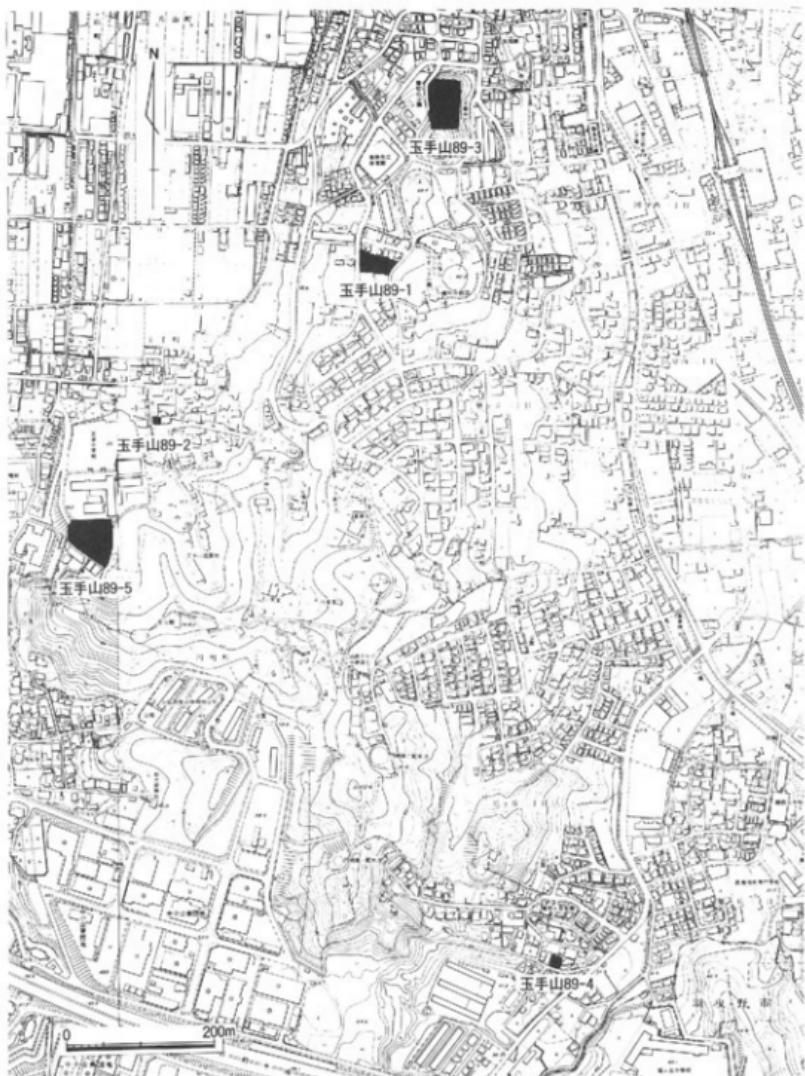


図-27 玉手山遺跡調査地位置図

89-1次調査

- ・調査地区所在地 柏原市玉手山145-8
- ・調査担当者 北野 重
- ・調査期間 1989年2月6日～3月30日 伊藤宅
- ・調査面積 350 m² / 1,195 m²

当調査区は、玉手山3号墳の前方部方向直ぐ西側の緩斜面地にあり、昨年度試掘調査を実施して奈良から平安時代にかけての火葬墓群が発見された場所である。玉手山古墳群は、前期の前方後円墳が丘陵尾根筋に多数点在しているが、その被葬者や豪族を比定するまで至っていない。この古墳群を築造し埋葬された集団は古市古墳群に先行する古墳群として河内地方の政局動向を知る上で大きな鍵を握っている。その解明の糸口として、古墳時代後期や奈良時代へと継続する遺跡の変遷も重要な緒となるだろう。

調査は、試掘調査結果に基づき東側の緩斜面地を3区に分けて実施した。北側から奈良から平安時代にかけての火葬墓と土坑墓が58基と南側から古墳1基を検出した。各遺構毎に説明を加えていきたい。

玉手山山田1号墳（仮称）

調査区の南東部に検出した直径約7.5mの円墳である。現状で僅かの高まりがあり、周溝の部分もその落ち込みが確認される。尾根筋の一端を掘削して墳丘部を削り出して築造した古墳で、墳頂部の高さは、63.5mである。3号墳頂標高は、82.3mを測る。主体部は、後世の耕作地造成等によって削平されて検出されなかったが、石室等の痕跡も見つからなかったので、木棺直葬の可能性が高い。周溝が古墳東側に確認された。幅3～4m、深さ約1.3mである。土層は、表土（1層）、薄茶黄色粘質土（2層）、薄茶褐色粘質土（3層）、黄灰色粘質土（4層）である。3層の埋土から埴輪と須恵器が出土した。埴輪は、ごく小さい破片の円筒埴輪少量と蓋形の形象埴輪が1点ほぼ完形で周溝内外側から転落した状態で出土した。これらの遺物は、当古墳のものではない。4層下層の地山直上から須恵器の杯完形品3点が出土した。この土器は、古墳の墳頂から転落したものか周溝に置かれたものか定かでないが当古墳に関係した供獻遺物と考えられる。古墳の周溝が途切れる墳丘の北北東の位置から須恵器杯身1点、杯蓋



図-28 調査区位置図

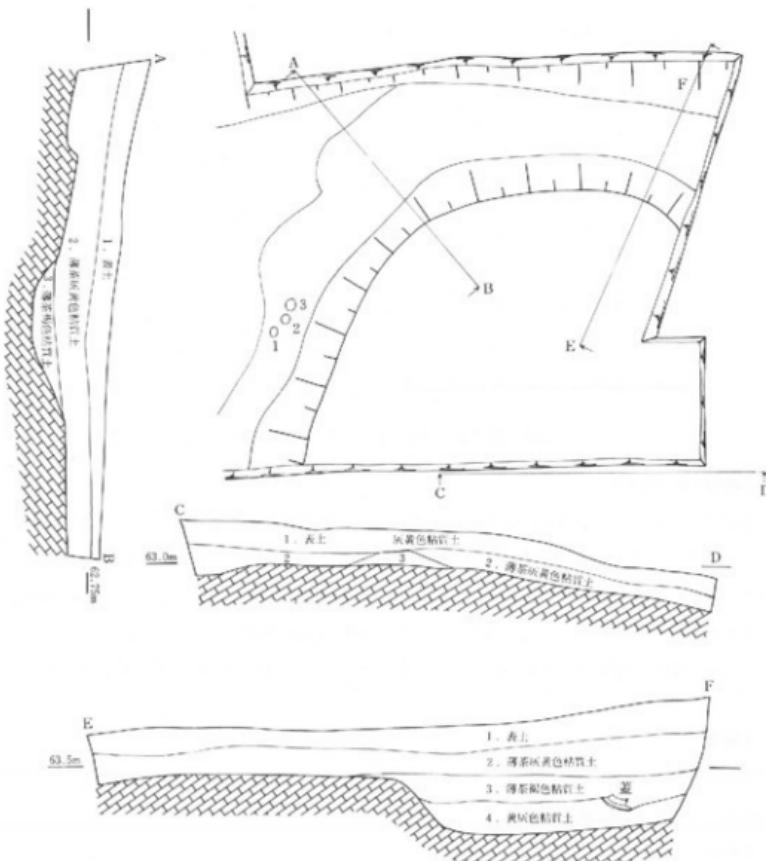


図-29 山田1号墳平面図・断面図

2点が約1m位の範囲内にかたまって出土した。

墳丘は、表上（1層）除去後に約20cmの厚さで薄茶灰黄色粘質土（2層）が見られた。墳丘の最下層の土層で版塗を成していない。遺物は出土しなかった。墳丘裾部に設定したトレンチでは埴輪の出土がほとんど確認されなかったことから、この古墳に埴輪が使われなかつた可能性が考えられる。古墳の南側は、調査区外へ伸びているため今回の調査では確認していない。

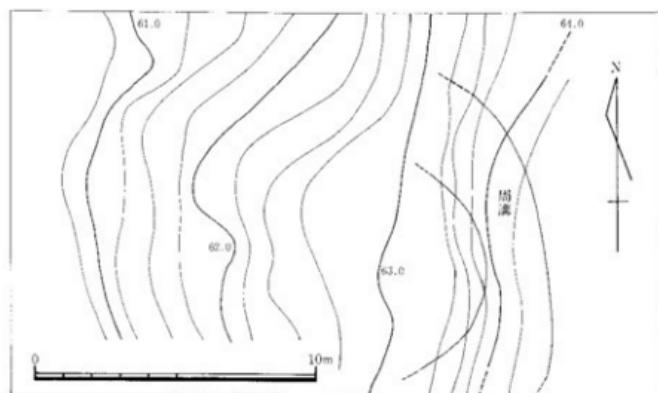


図-30 玉手山山田1号墳平板測量図

古墓群(8~58号)

古墳は、奈良から平安時代にかけての火葬墓と土坑墓がある。火葬墓の中には、藏骨器を持つものが多い。現状では近年の盛土が平均約1m積上げされており、古墓は、旧表土から10~20cm下層からの検出で大半が削平を受けている。調査区の中央部に斜面に添うように約40cm幅の南北方向の小溝が走る。この小溝を中心として東側斜面と西側テラス状平坦地に古墓が造られている。小溝の傾斜は、北側へわずかに下向している。火葬墓の土坑の掘形断面は、半円形か逆台形である。

8号墓

小溝より2.5m東側の標高61.6mの位置にあり、径70cmの円形土坑である。埋土は、黄灰色粘質土で炭を少し含み鉄釘が一本出土した。

9号墓

標高61.6mの最も高所にあり、小溝の東側2mに位置している。径50cmの円形土坑に須恵器の壺(13)を正営位に埋納している。釘の3本と土器の中から火葬骨と炭が出土した。

10号墓

9号墓の北側1.5mの位置にあり、最も標高が高い(61.8m)。径約65cmの円形土坑である。埋土中火葬骨50gと炭が出土した。

11号墓

小溝の直ぐ東側にあり、標高61.1mに位置し径60cmの大きさを測る。藏骨器壺(94)と杯(54)、椀(60)が出土した。杯と椀の間から火葬骨と炭が出土した。

12号墓



図-31 古墓全体図

玉手山遺跡

1.6×1.9mの隅丸方形の土坑墓である。小溝より東側へ1mの位置にある。遺物は、土師器片と鉄釘が3本(103、106、107)出土した。南側と西側に部分的な石囲いがある。

13号墓

小溝より1.5mの東側にあり、径65cmの大きさを測る円形土坑である。遺物は、須恵器壺(14)と火葬骨10gが出土した。

14号墓

小溝の直ぐ東側に、径65cmの大きさを測る円形土坑で、標高61.1mで検出した。土師器碗(62)を正営位に置き鏡(113)を入れ鉢(72)を上から覆している。鏡の上下層から炭と火葬骨90gが出土した。

15号墓

14号墓の直ぐ東側に、径37cmの円形土坑である。大皿(38)と鉢(65)を正営位に置かれた須恵器壺(17)の上に被せている。壺の中から多量の火葬骨380gが出土した。

16号墓

小溝の直ぐ東側に検出した径40cmの円形土坑である。埋土は、黄褐色粘質土にわずかに炭が混入していた。人骨はなかったが、後世の攪乱で蔵骨器が抜き取られたものかもしれない。

17号墓

小溝から東側へ約1mの位置にあり、径30~40cmの楕円形土坑である。小さな鉢(63)を下にして大きな鉢(81)を上から被せている。土器内に少量の炭と火葬骨が出土した。また、土坑の縁辺から小刀(114)が出土したがこの墓に伴うものかどうかは不明である。

18号墓

小溝に切断されたように検出した径30~35cmの楕円形土坑である。底部に扁平な石を敷いて大皿(26)を置き、その上に須恵器の平瓶(9)の頸部を打ち欠き被せている。瓶の中に多量の火葬骨449gが出土した。

19号墓

小溝の西側50cmの場所から検出した径30~35cmの楕円形土坑である。土師器皿(33)を裏向けてし甕(88)を同様に口縁部を下に被せている。標高は、61.1mである。

20号墓

19号墓の直ぐ北側にあり、径35cmの円形土坑である。大皿2枚(40、41)を裏返しその上に鏡(114)を載せている。更にその上に甕(87)を被せている。鏡は、多量の炭と火葬骨90gの中にあった。

21号墓

小溝の西側隣に検出した径40cmの円形土坑である。埋土中炭が少し出土したが、人骨は見られなかった。



図-32 火葬墓平面図・断面図その1

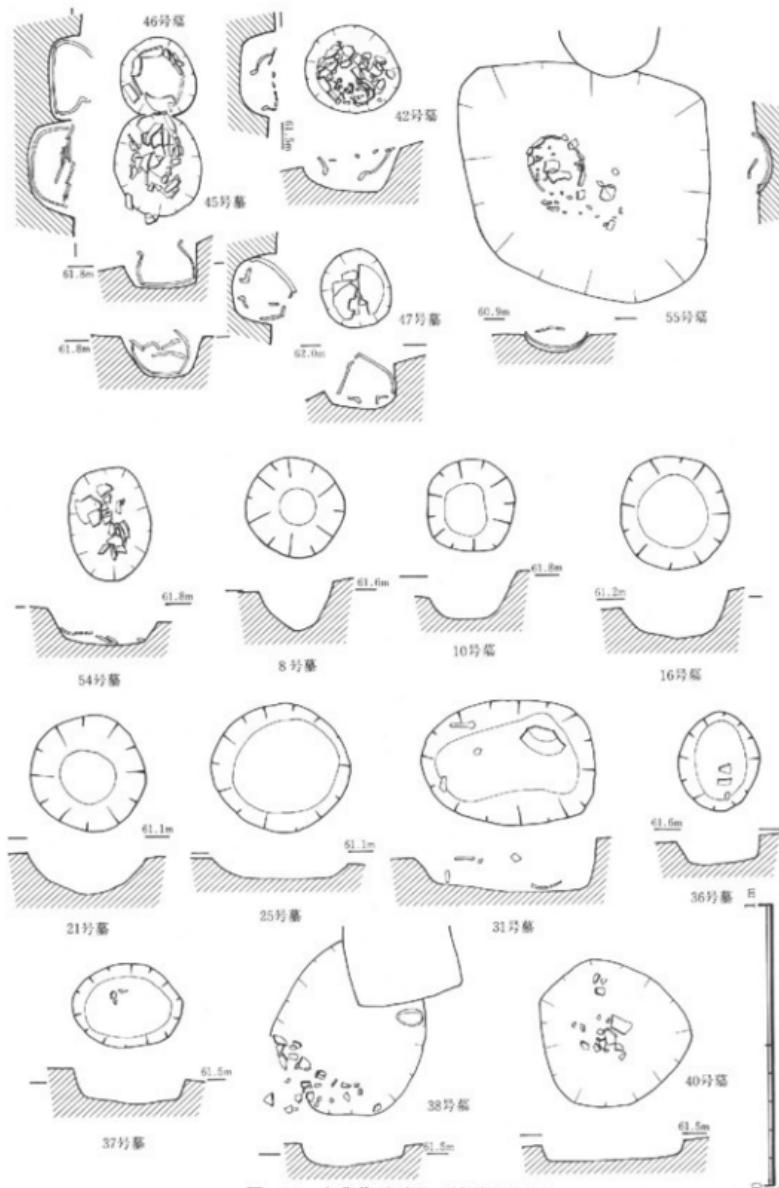


図-33 火葬墓平面図・断面図その2

22号墓

小溝の直ぐ西側に検出した径35~40cmの楕円形土坑である。埋土中須恵器壺(15)と土師器片が出土したが、上部が削平されていた。火葬骨35g出土した。

23号墓

小溝の北側端に検出した径30cmの円形土坑である。土師器甕(89)内に大皿(46)と炭と火葬骨が入った状態で出土した。

24号墓

小溝から約1m西側で検出した径20~25cmの楕円形土坑である。土師器甕(79)を倒立させその中に皿(45、73)を入れている。

25号墓

小溝西側1mから検出した径45~50cmの円形土坑である。埋土中須恵器壺(16)と土師器の碎片が少量出土したが、遺構のこりが悪くこの墓に伴うものか明確でない。

26号墓

小溝から2m西側で検出した径35cmの円形土坑である。土師器鉢(51)を正営位に置き甕(75)を被せている。鉢の中から火葬骨が少量出土した。

27号墓

小溝から2.5m西側で検出した径30cmの円形土坑である。土師器甕底部(79)の中に大皿(43)と少量の炭と火葬骨が入っていた。

28号墓

小溝の西側3mの位置に検出した径25~30cmの楕円形土坑である。皿(34)を正営位に置き杯(58、59)をその上からさらに、甕(77)を被せている。標高は、60.9mである。火葬骨は、30gが出土した。

29号墓

小溝から約5m西側へ離れた斜面への接点部分に位置する。一边40×80cmを測り平底の隅丸方形の土坑である。鉄製品(112)と土師皿(42)が出土した。人骨が15g出土した。

30号墓

29号墓の北側1mの位置にあり、径30cmの円形土坑である。遺物は、土師器甕底部と皿(50)と炭、火葬骨が出土した。標高は、60.7mである。

31号墓

29号墓の南西部1mに位置し、径45~60cmの楕円形土坑である。埋土は、1層の黄灰色粘質土に少し炭を含み、2層はほとんど炭層で火葬骨を少し含み、3層は炭と黄褐色粘質土との混層である。遺物は、釘3本と土師器皿(44、55)が出土した。火葬骨は、190gが出土した。

32号墓

玉手山遺跡

小溝から約6m離れた斜面地にある径25cmの円形土坑である。遺物は、土師器壺(倒立)と皿が出土したが遺存状態が悪く実測しえなかった。

33号墓

小溝から西側方向へ約10m離れた斜面地にあり、径30cmの円形土坑である。標高60.1mである。遺物は、土師器壺(86)と皿(30)が出土した。壺は正営位である。火葬骨10g出土した。

34号墓

小溝直ぐ東側に検出した径25~35cmの楕円形土坑である。遺物は、縁釉陶器(90)を皿(22、31)に被せている。火葬骨が55g出土した。標高61.9mである。

35号墓

小溝から1.5m西側に検出した径20~25cmの円形土坑である。火葬骨少量が炭と共に出土した。

36号墓

小溝より西側へ2.5mに位置し、径30~35cmの楕円形土坑である。遺物は、土師器小片が出土したが藏骨器ではなく混入遺物の可能性がある。

37号墓

36号墓の南西直ぐ隣に検出した径30~40cmの楕円形土坑である。標高61.5mである。遺物は、土師器片が少量出土した。

38号墓

小溝より2.5m西側にあり、39号墓に切られた状態で検出した径55~60cmの楕円形土坑である。遺物は、土師器片が攪乱を受け周辺に散乱していた。火葬骨が約100g出土した。

39号墓

小溝から西側へ2.5mに位置し一辺40cm以上の隅丸方形土坑である。遺物は、土師器片が少量出土した。埋土中炭が見られた。

40号墓

小溝から西側へ3mの位置にあり、径50~55cmの円形土坑である。遺物は、土師器が少量出土したが実測しえるものはなかった。炭が少量見られた。標高61.5mである。

41号墓

40号墓の直ぐ西側に検出した径30cm~35cmの円形土坑である。土師器壺(85)を被せた状態で出土した。土器の中に火葬骨があり、四周に攪乱していた。

42号墓

41号墓の西側直ぐ隣に検出した径35cmの円形土坑である。土師器壺(91)を裏返して上層から碗(52、53)を埋納している。壺内より85gの火葬骨が出土した。標高61.3mである。

43号墓

小溝から西側へ5m下方の位置にあり、一辺75cmと1.2m以上の隅丸方形土坑である。南西部から土師器壺(66、67)と須恵器杯(6)がかたまり、人骨110gが火化した状態で炭と共に全體から出土した。

44号墓

小溝から8.5m西側の位置にあり、径約40cmの円形土坑である。埋土中炭が少量出土した。標高60.9mである。

45号墓

小溝直ぐ東側に検出した径30~35cmの楕円形土坑である。土師器壺(92)と皿片が出土した。甌は口縁部を上向きに置き、皿は蓋として被せていたと考えられる。火葬骨97gが出土した。

46号墓

45号墓の直ぐ北側に接して検出した径25~30cmの楕円形土坑である。土師器壺(93)を正営位に据え、内側から皿(32)が出土した。

47号墓

小溝東側へ50cmの位置にあり、径25cmの円形土坑である。口縁部を打ち欠いた須恵器壺(10)を倒立させていた。土器内より60gの火葬骨が出土した。標高62.0mである。

48号墓

小溝から1mの位置に49号墓を切った状態で検出した。径60cmの楕円形土坑である。須恵器壺(11)を正営位に置いている。土器の上半は削平を受けている。土師器片が少量出土していることから蓋が存在していたのであろう。

49号墓

小溝から西側へ1mの位置にある一辺60~80、105cmの隅丸方形土坑である。遺物は、須恵器と土師器片が少量出土したが上層部がほとんど削平されているのでこの土坑に伴うものか明確でない。火葬骨が75g出土した。

50号墓

小溝から3m西側方向に位置し、径75cm以上の楕円形土坑である。遺物は、土師器が数片と炭が少量出土したのみである。標高61.5mである。

51号墓

50号墓に切られた状態で検出した一辺90.5cm以上の隅丸方形土坑である。遺物は、土師器と須恵器が少量出土したが時期が明確のものがない。炭と火葬骨105gが出土した。

52号墓

小溝の東側4mの斜面上に検出した径65~75cmの楕円形土坑である。位置が他の古墓群と離れている事と人骨が出土していないことから性格の違う遺構かもしれない。しかし埋土中から少量の炭が出土している。

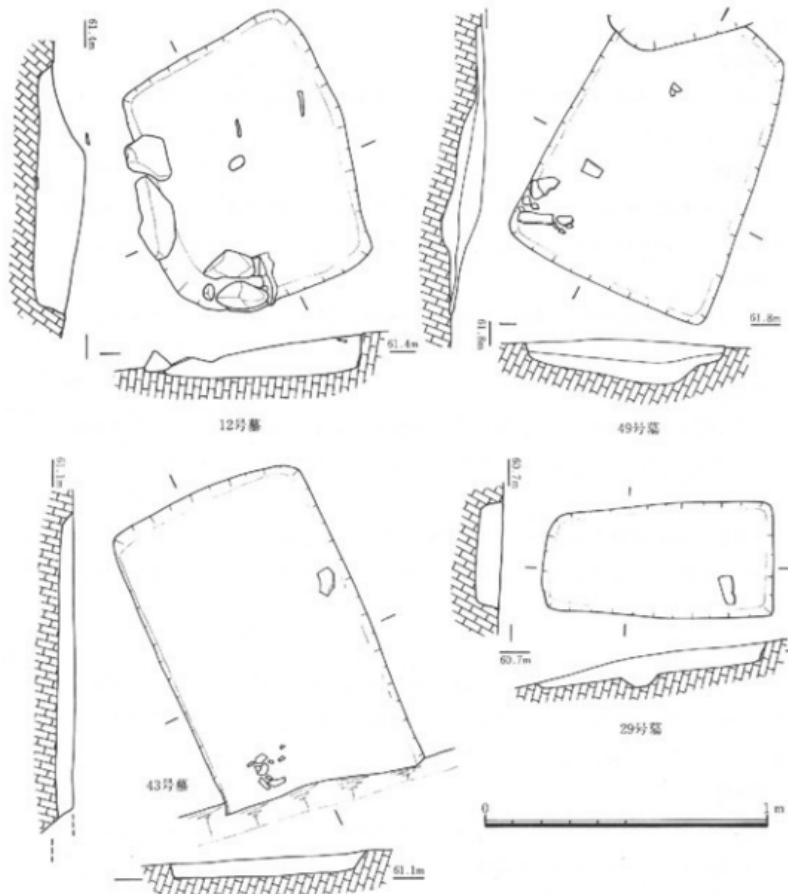


図-34 土坑墓平面図・断面図

53号墓

調査区の南端部から検出した隅丸方形の土坑である。一辺120.3cm以上の隅丸方形の土坑である。埋土中炭は含まず埴輪が少量出土した。古墓にはならないかもしれない。

54号墓

小溝内から検出した径30~40cmを測る楕円形土坑である。遺物は、遺存状況の悪い土師器甕が出土した。恐らく1個体があったと考えられる。

55号墓

小溝から8.5m離れた一番西側の一辺80~90cmの方形土坑である。中央部に土師器甕が出土し、この土器を中心として火葬骨が65g拡散して出土した。本来は円形土坑が破壊を受け拡散したものである。

56号墓

小溝から約4.5m西側から検出した径30cmの円形土坑である。遺物は、須恵器片が数片と炭、火葬骨160gが出土した。標高は、61.3mである。

57号墓

小溝から西側へ1.5mの位置にあり、径25cmの円形土坑である。遺存状態が悪く土師器片と炭を少し出土したのみである。

58号墓

49号墓の直ぐ南側から検出した径25~30cmの楕円形土坑である。この土坑も土師器片と炭を少量出土したのみである。

出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、古墳時代の須恵器、土師器、埴輪等の遺物と奈良から平安時代にかけての須恵器、土師器、銅鏡、鉄製品、人骨、炭等がある。これらの遺物は、古墳の周溝や火葬墓、土坑墓の遺構から出土したものである。

須恵器

古墳に伴う遺物として杯蓋身(1~3)と甕(7)、壺(8)がある。杯は、玉手山山田1号墳に伴うもので口縁端部は内傾する平面か段を持ち、肩部の稜は明瞭に遺っている。甕は、古墳周辺部からの出土である。口縁部の径が体部より少し大きくな字状に短く広がる形態で、口縁部と頸部の外面に2段の波状文を施し、胴部の中央に刺突文が巡る。壺は、肩部に二段のヘラ書き文があり、底部近くはカキ目の痕跡がある。4~6の杯蓋身は、飛鳥時代のもので祭社か土坑墓に伴う遺物である。

奈良時代から平安時代までの遺物は、口縁部を打ち欠いた平瓶、壺等の中に火葬した人骨を埋納しておりすべて藏骨器である。これらの土器の内全形を復元出来るのは17だけである。9の平瓶の底部にヘラ記号がある。鋭いヘラ先で3本の平行した線を引いた後再び同一線上を幅のあるヘラ先でなぞっている。ヘラ記号は、書き始めを横一線に揃え中央線だけ少し長く延ばしている。なぞった線の末端は、粘土の塊が溜っている。工人がヘラ記号を付ける必要がなくなったため消去したのではないか。90は、縁陶器である。口縁部と底部が欠損して軸の遺存

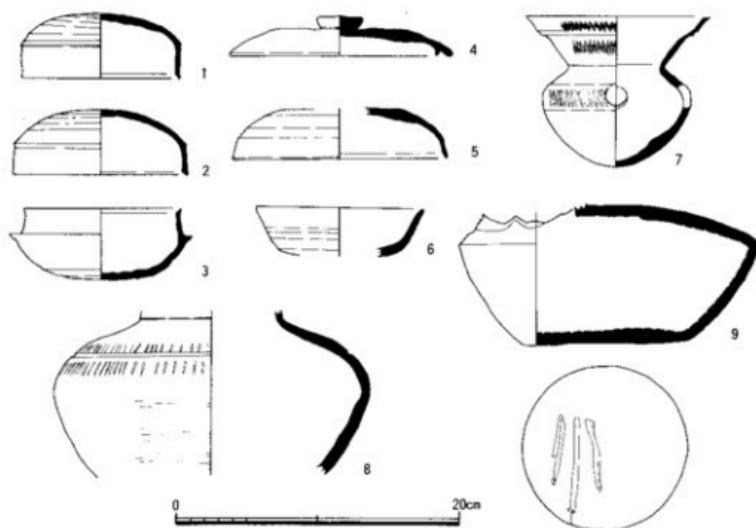


図-35 出土遺物（須恵器 その1）

状態も風化が著しく悪い。頸部と胴部の界に小さな段がある。胎土は、乳白色の素地で白・黒色の砂粒を含んでいる。内面は黄緑釉の上に線釉が見られ、外面は線釉のみである。この土器と共に伴しているのは、22の皿と32の台付き皿である。須恵器の蔵骨器でセットとなる蓋が1点の出土もなく被葬者が生前に関係した持物が使用された遺物が多いようである。

土器

器種は、杯、皿、鉢、碗、高杯、壺、甕とバラエティーに富んでいる。壺や甕は、最も量的に多く出土しているが、遺構の検出状況が悪いので大型の器種については復元可能のものが少ない。壺、甕、大型の鉢等を蔵骨器とし、他の小型の杯、皿、鉢、碗等をその蓋として使用している。18は小型の手捏ね土器である。古墳時代の祭祀関係のものであろうか。22は、口径9.1cmの小皿で内面板ナデ調整で、外面は指調整である。胎土は3mm以下の砂粒が多く粗いものでクサリ礫を含んでいる。28は、口径11.3cm、器高3.9cmの杯である。内面の調整は剥離が激しく不明である。外面は、ナデとヘラ削り調整である。色調は、橙黄色である。31は、台付きの皿である。口縁端部を小さく上方に摘み上げている。胎土は、22と同様で色調は茶灰色である。

40は、口縁部外面を強くヨコナデして端部を内側へ肥厚させている。内面を板ナデし外面を指ナデ調整している。胎土は、石英、長石、金雲母等砂粒を含む。色調は、淡茶灰色である。49は、唯一の黒色土器である。内外面風化が激しいものであるが部分的に炭素の吸着がみられ

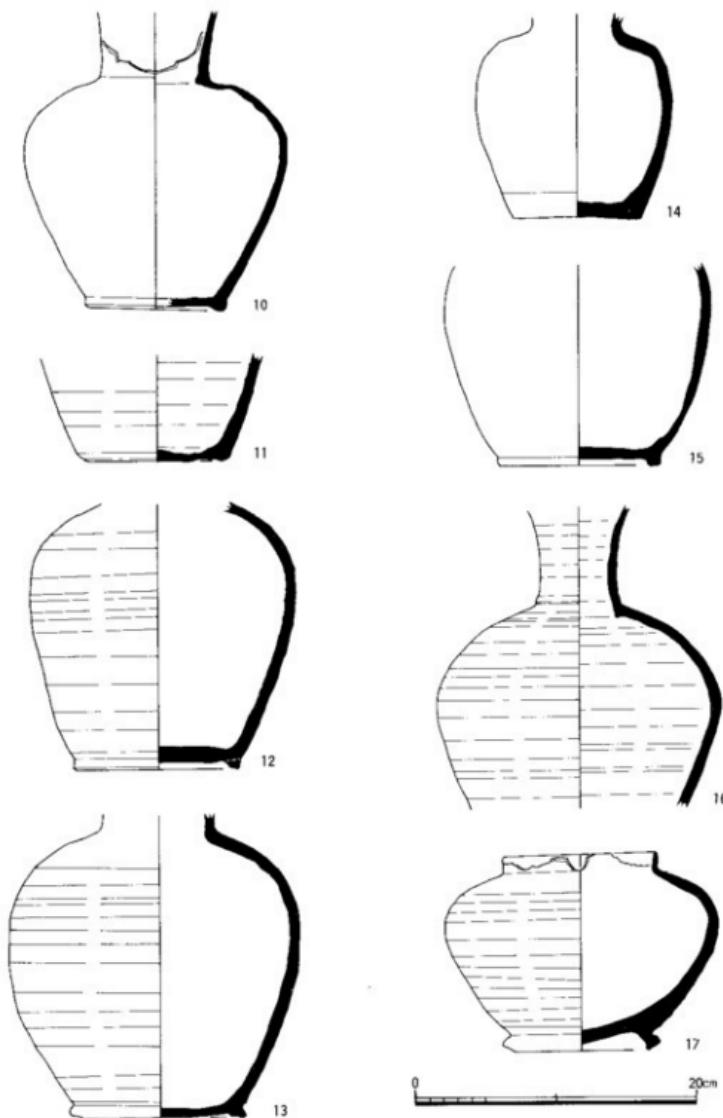


図-36 出土遺物（須恵器 その2）

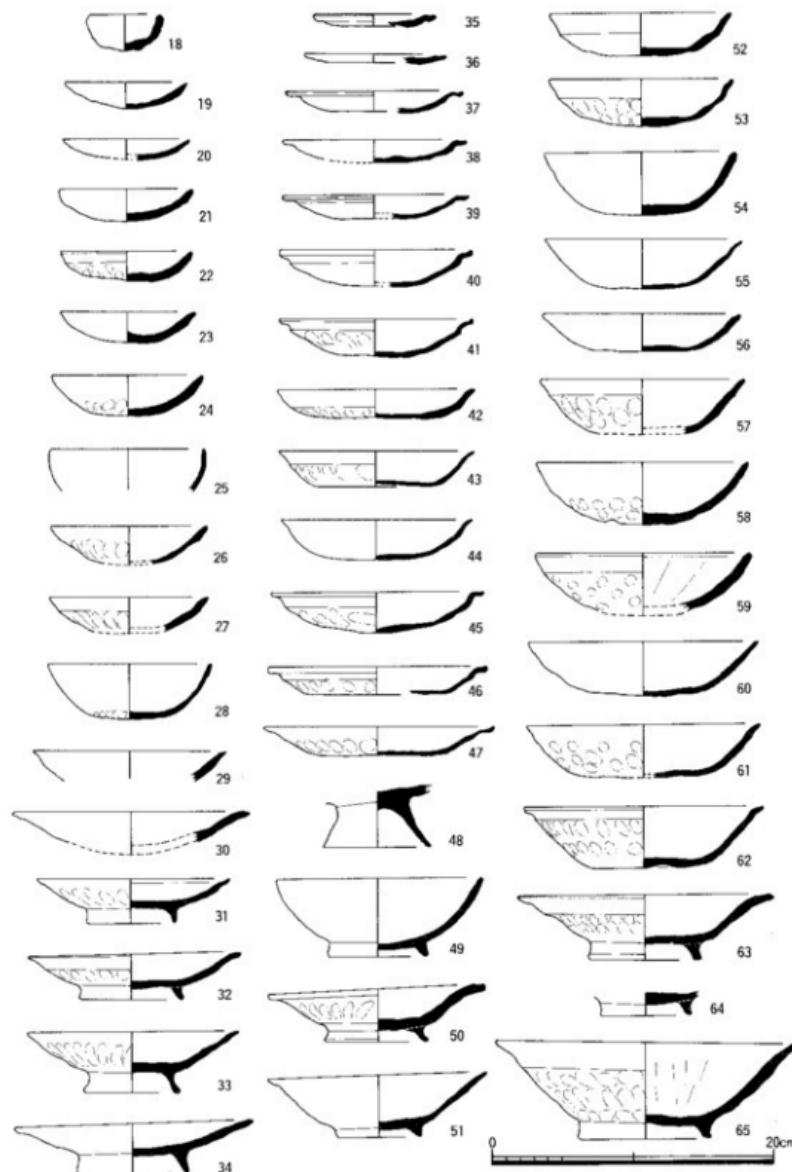


図-37 出土遺物（土師器 その1）

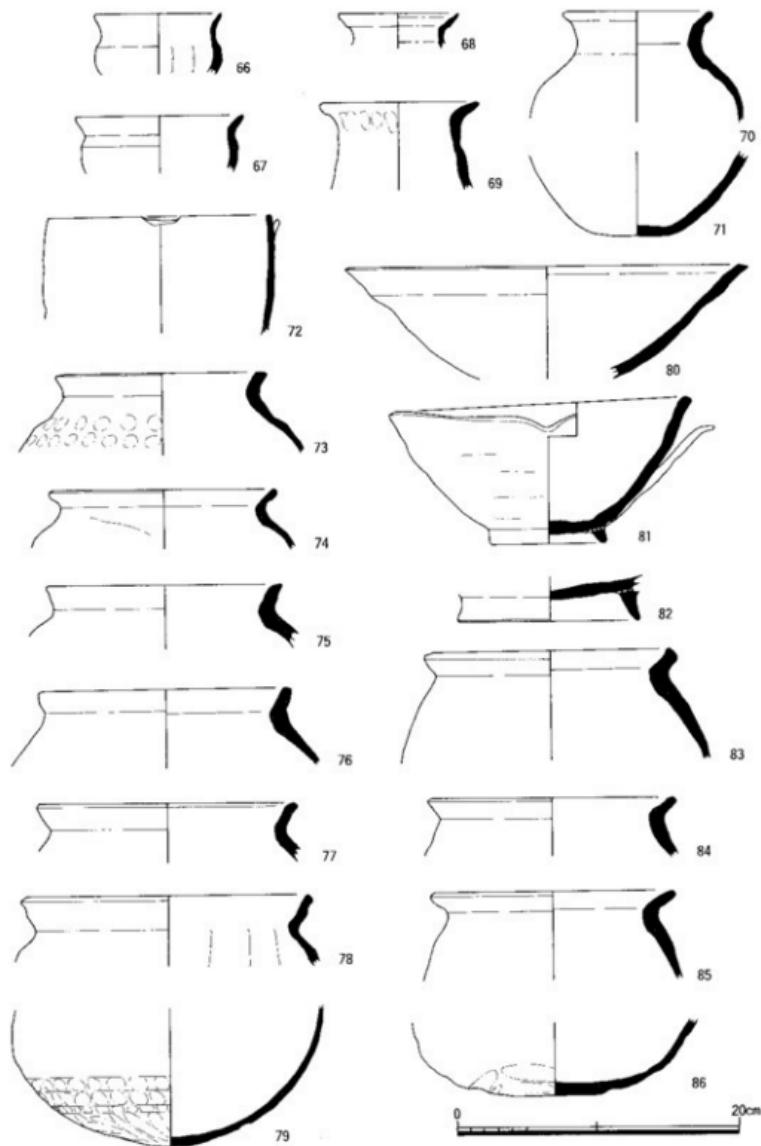


図-38 出土遺物（土師器 その2）

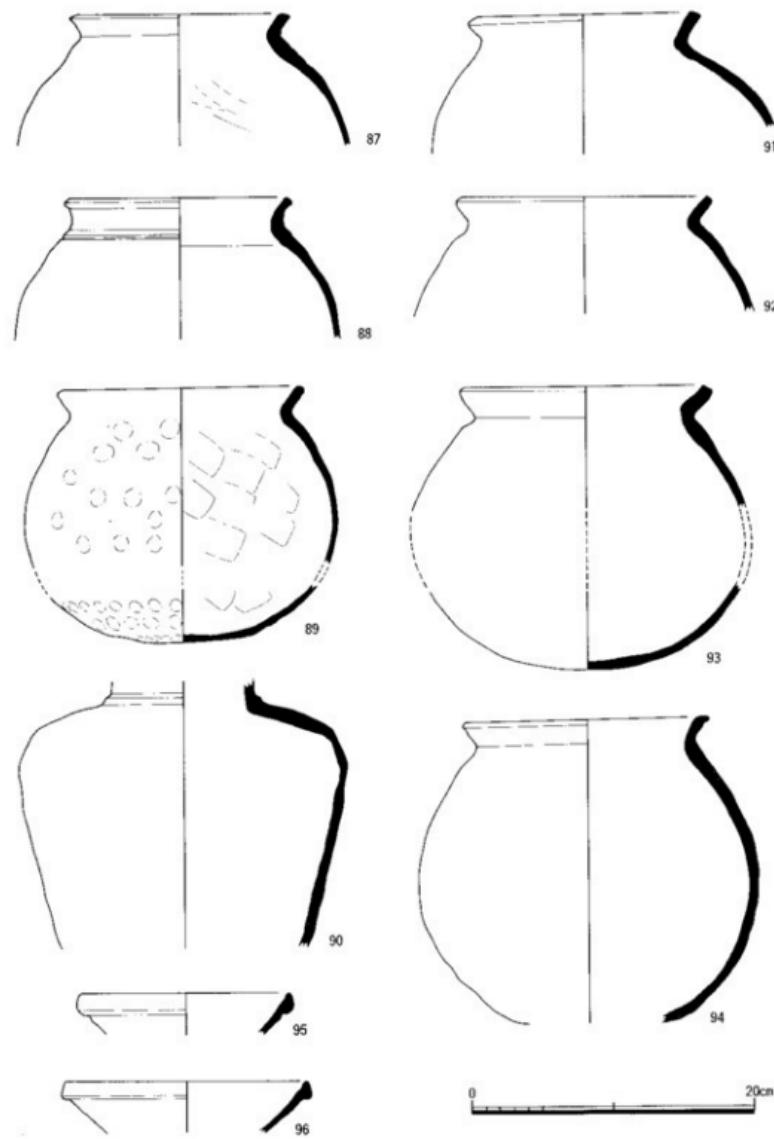


図-39 出土遺物（土師器 その3）

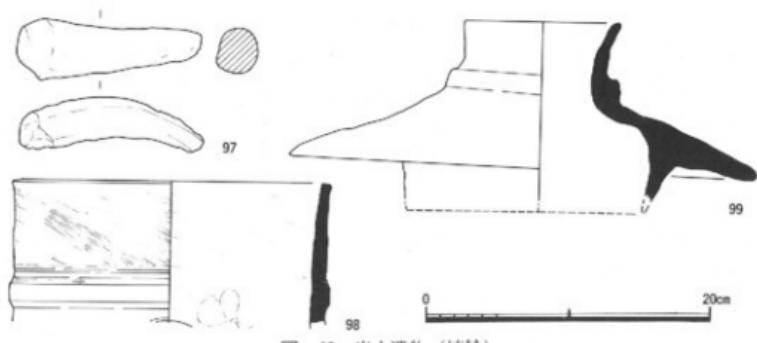


図-40 出土遺物（埴輪）

る。口縁部内側に僅かな段か沈線が見られる。胎土は、石英、長石、金雲母を含む少し粗いものである。小溝の中から出土している。62は、口径8.4cmの壺である。口縁部を外反させ端部を内側に折り曲げている。内面はナデ調整で、外面は指押えした後ナデ調整を行っている。87は、口縁部を外反させた壺である。口縁端部は、上方に平坦面を持ち、体部より厚い作りである。胎土は、石英、長石等の砂粒を含んでいる。他の壺も口縁端部の形状が少し違うが同様の形態である。

磁器

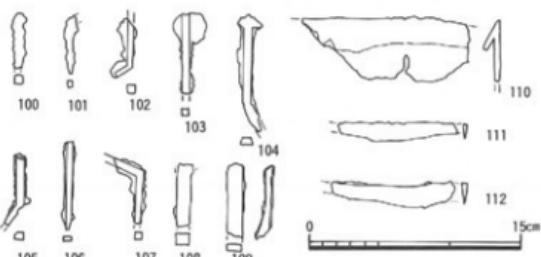
磁器は、2点出土した。それぞれ攪乱土層からであるが火葬墓に伴うものであろう。素地は、灰白色で釉は薄緑灰色である。口縁は、玉縁状を成し、胎土は、精良であるが、白黒色の砂粒を少し含んでいる。

埴輪

97は、動物埴輪の尻尾である。恐らく馬と考えられる。98は、円筒埴輪である。タガが低く粗雑な造りである。99は、玉手山山田1号墳の周溝から出土した蓋であるが、他の古墳から転落した遺物であろう。ほぼ完形である。

鉄製品

100~106までは、鉄釘である。完存したものはなく、火葬墓に伴うものは火化された場所から拾骨した時偶然に混入したものであろう。



107は、鍼である。

図-41 出土遺物（鉄製品）

108、109は、不明鉄片である。

110は、一端を折り曲げ袋状にしたものである。111、112は、小刀である。

銅鏡

113は、14号墓から出土した瑞花双鳳八稜鏡である。奈良文化財研究所の肥塚氏に蛍光X線分析を依頼した結果、

アンチモン、錫、銀、鉄、チタンを不純物として含むがい

ずれも1%以下で銅と鉛の銅合金製である。径8.6cmを測り、この形の鏡の中では厚手でしっかりした造りである。模様構成は、鳥文が交互反対に内向し、滴形となり簡素化が著しい瑞花は同じく内向している。鳥文がしっかりした尾羽根を持ち、外区文が点列化していない。

104は、20号墓から出土した縁を持つ銅鏡である。径7.4cmを測り薄手である。紐孔には紐が通したままの状態で遺存しておりその上から紙か布で覆っている。鏡鑑の模様は不明である。

まとめ

玉手山丘陵の西側斜面地は、近年の調査で古墳時代中期から後期にかけての古墳が頻繁に検出されるようになった。当調査区内では、主体部が木棺直葬と考えられる古墳1基と隣接する場所にもう1基が想定される。これらの古墳が、前期に属する1~3号墳とどのような繋がりがあり安福寺横穴群との拘わりがどのように継続していくのか今後の問題としておきたい。

土坑墓を含む火葬墓群の検出は、総数58基を数えた。小溝は、この墓地の中心部に造られ、墓道の性格をもっているように考えられる。隅丸方形の土坑墓は、数基しかないが奈良時代前後に想定することが出来る。埋葬方法は、墓坑を掘り窪めただけのものと若干鉄釘が出土しているものとがあり木棺を使用したものが存在するかもしれない。

調査区の南側にくの字状に曲がる溝を検出しているが、これは、主体部の施設が削平された小古溝又は火葬墓の周溝ではないかと考えられる。

火葬墓群は、奈良から平安時代までの時期に継続するもので、鏡鑑が2面出土しているが全体に共伴した遺物は少ない。其の被葬者は周辺の集落に対応するものか氏族の共同墓所か今後の検討課題である。

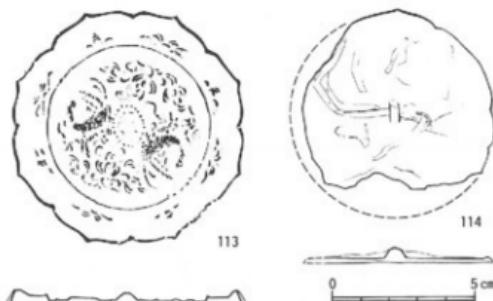


図-42 出土遺物（銅鏡）

第8章 田辺遺跡

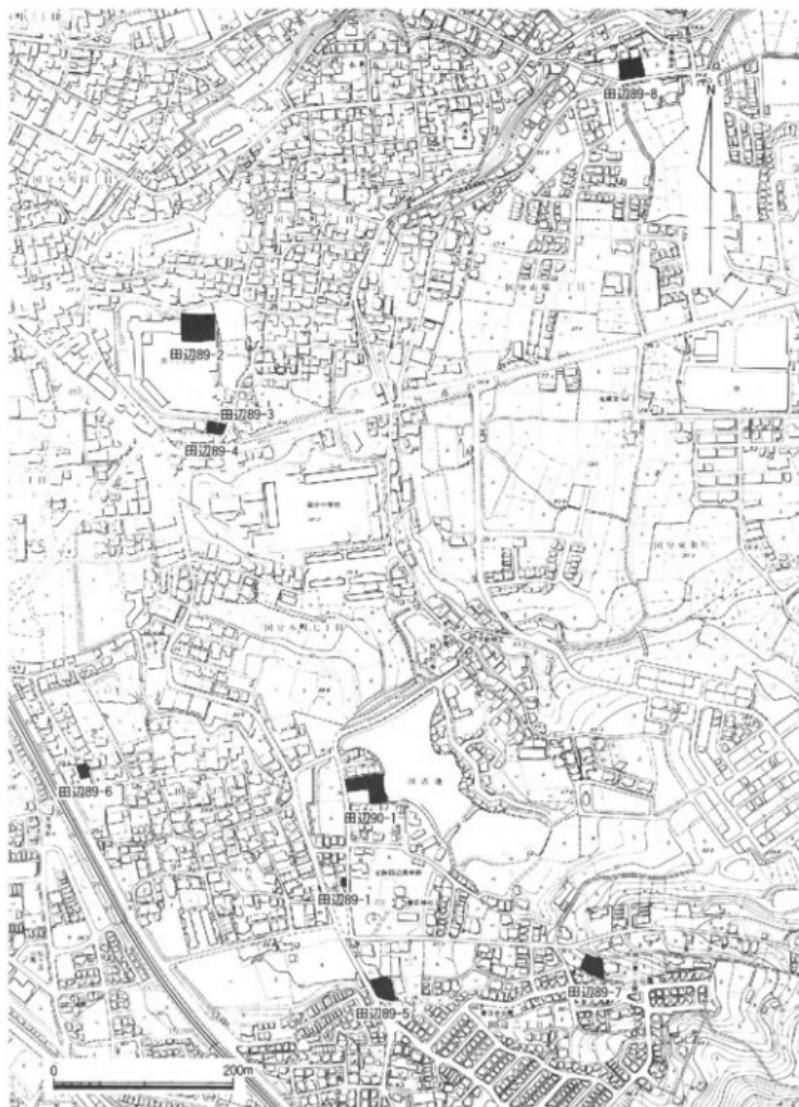


図-43 田辺遺跡調査地位置図

89-3次調査

- ・調査地区所在地 柏原市国分本町6丁目763-8の一部
- ・調査担当者 北野 重
- ・調査期間 1989年10月4日～10月6日
- ・調査面積 11m² / 88.03m²

当調査区は、田辺遺跡の北側丘陵の西部にあたり、直ぐ南側に国道25号線がほぼ東西方向に付けられている。国分小学校の南側の南向きの緩斜面にあたり、個人住宅建築の為の発掘調査である。

調査は、2ヶ所のトレンチを設定した。第1トレンチは、東側に2×4mの規模である。層位は、上層約4cmが盛土と攪乱土である。下層は、部分的に厚さ10cm位の茶灰色粘質土を確認した。この土層から、土師器、須恵器と共に鉄滓、轆羽口の鍛冶関係遺物が出土した。

遺構は、トレンチの北側から大部分が攪乱された土坑状の落ち込みを検出した。規模は、東西1.4m以上、南北0.7m以上、深さ0.1mである。どのような性格か不明である。

遺物は、土師器、須恵器、鉄滓、轆羽口が出土した。

1は、口径9.7cmの須恵器杯蓋である。天井部には擬宝珠様つまみが付く形態のもので、返りと口縁部がほぼ同じ高さである。色調は、青灰色で、胎土と焼成は良好である。

2は、口径9.8cmの須恵器杯身である。返りがなく口縁部が外上方へ真直ぐ伸び端部が丸く終る。底部は高台がなく平底である。色調は、灰青色で焼成はやや甘い。1の蓋とセットになる同時期のものである。陶邑編年Ⅲ型式の第1段階か第2段階のものである。

3は、口径12.8cmの須恵器杯身である。返りが短く上方にたちあがり扁平な体部である。色調は、青灰色。焼成は、良好である。

4は、口径17.2cm土師器杯である。口縁部は、外面を強く押え外反するように仕上げ端部は丸い。内外面の摩耗が激しく調整は明確でない。色調は、茶灰色、胎土は、石英、長石、くさり礫を含む。

5は、口径11.8cmの土師器瓶である。頸部は短く立ち上がり口縁端部はわずかに外方へ折り曲げている。肩の張りがなく、体部に続いている。色調は、赤茶色、胎土は、石英、長石、くさり礫を含んでいる。

6は、フイゴ羽口である。先端部が欠損していないが、後端部が遺存している。現存長9.7cm、体部外径7.4～8.5cm、体部内径3.8～6.0cmである。色調は、赤褐色で1、2mm程度の砂粒が

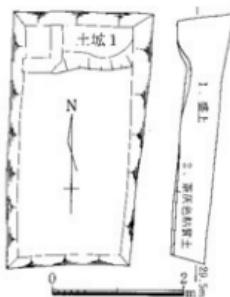


図-44 トレンチ平面図・断面図

多く含まれる。周辺部から出土するフイゴ羽口よりやや大型である。また、後端が八の字状に拡がっており、国分地域では初見である。

鉄滓は、総重量2,137 g が出土した。重量別に見ると、一個の重量が50 g 未満のものは、14コ以上あり合計486 g を測る。100 g までが6コで合計428 g を測る。250 g 、300 g 、350 g 、400 g が各1コである。100 g 未満のものと200 g 以上のものに大きく分かれる。標準磁石を使用して磁力を測定した。磁力1は50 g 未満のものが1コ、磁力2は、50 g 未満のもの2コ、磁力3は、100 g 未満のもの5コ、磁力4は、100 g 未満のもの5コ、200 g 以上のもの1コである。磁力5は、100 g 未満のもの7コ、200 g 以上のもの3コである。100 g 未満のものは、磁力に関係なく存在するが、200 g 以上のものは磁力が強い位置でかたまる傾向がある。

(1)、千葉県文化財調査協会 穴澤義功氏に紹介して頂いた標準磁石を使用したものである。

35cmの吊り糸に磁石を取り付け、遺物を近付けて磁石が反応した位置を読みとる方法である。

(2)、反応する距離で磁力を決定する。磁力1は、6mmまでである。6mm増す毎に磁力が2、3と大きくなる。

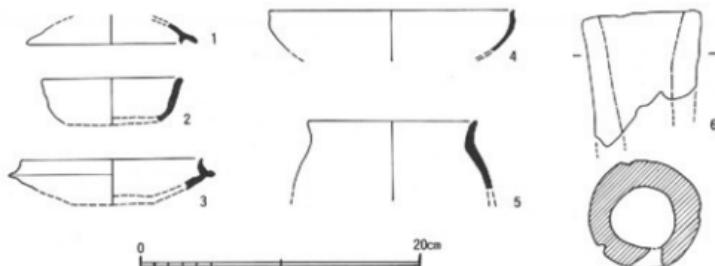


図-45 出土遺物

89-5次調査

- ・調査地区所在地 柏原市田辺2丁目2072
- ・調査担当者 安村俊史
- ・調査期間 1989年11月27日～30日
- ・調査面積 25m² / 496.60m²

事前に2箇所で試掘調査を実施した結果、遺物の出土をみた調査地北端に5m四方の調査区を設定し、調査を実施した。その結果、表土、盛土の直下で明黄褐色砂礫土の地山に至り、遺物包含層は残っていないものの、土坑-1を検出することができた。なお、調査区の西側は、過去に石垣を築く際に大きく擾乱されている。土坑-1は1.3m×1.4mの方形平面を呈し、二段に掘り込まれている。深さは現存値で54cmである。土坑-1の下層には、土坑-2がみられる。土坑-2は調査区の南西部で検出され、落ち込み状を呈する。あるいは旧地形とそれに伴う遺物包含層であるのかもしれない。土坑-1は暗褐色土、土坑-2は淡褐色土を埋土とし、どちらからも、土師器、須恵器が比較的まとまって出土しており、共に奈良時代と考えられる。



図-46 調査区位置図

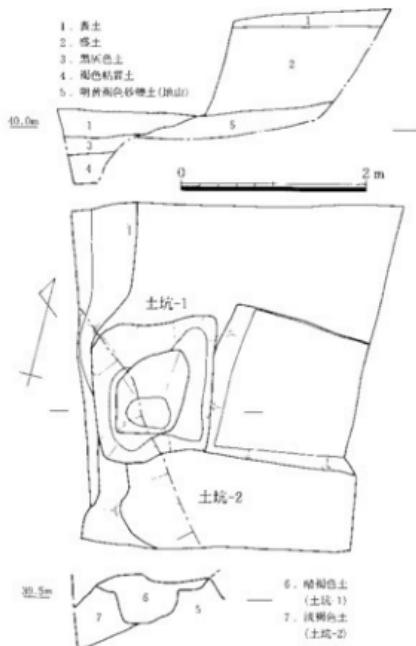


図-47 平面図・土層図

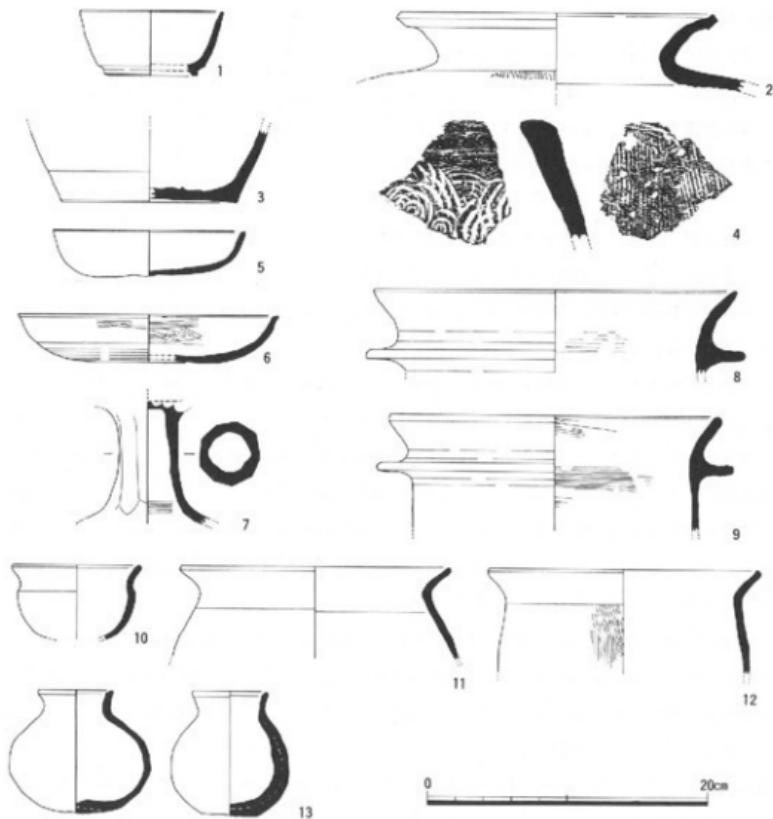


図-48 出土遺物

出土遺物は1～4が須恵器、5～13が土師器である。4・5・7・11～13は土坑-1、1・8・9は土坑-2、その他は盛土から出土した遺物である。1は高台を有する小形の杯身、2は壺の口縁部、3は底部である。4は甌の口縁部と考えられ、外面に平行叩き、内面に同心円叩きがみられる。5・6は杯、7は9面の面取りを施す高杯脚部、8・9は羽釜、10はミニチュアの壺、11・12は壺である。13は須恵器の横瓶を模したミニチュアと考えられ、手づくねである。半球状の体部2個を接合し、それに口縁部を取り付けたものである。表面剥離のため、調整は不明であるが、接合痕が明瞭に残っており、難な調整である。10の壺などと共に使用された祭祀に関わる遺物であろうか。遺物はすべて、7世紀から8世紀にかけてのものであり、田辺庵寺との関連が推定されるものである。

89-6次調査

- ・調査地区所在地 柏原市田辺1丁目5-19
- ・調査担当者 安村俊史
- ・調査期間 1989年12月1日～15日
- ・調査面積 60m²/251.43m²

調査に際して、当初、調査対象地の南端に2m四方の調査区を設定し、調査を実施したが、地表下10～20cmで明黄褐色粘質土の地山に至り、掘立柱柱穴等の遺構が存在することが確認された。そのため、

設計業者に盛土等による遺構面の保存を要望したが、遺構面が浅いため保存は不可能という回答があり、建物予定地ほぼ全面を調査することになった。

調査の結果、調査区中央から東側にかけて、地表下20cm前後で地山に達し、掘立柱柱穴等の遺構が存在することが確認されたが、既設家屋建築に伴う削平、および家屋基礎によって遺構の残存状態はあまり良好ではなかった。また、西側は南北方向の溝を挟んで溝状に緩やかに傾斜しており、灰褐色砂質土、黒褐色砂質土の遺物包含層が堆積するが、地山面が深いため、一部を断ち割って土層の確認をしたのみである。

遺構は、掘立柱柱穴が50、溝が7条検出された。掘立柱柱穴は一辺60cm前後の方形平面を呈するものから、直径15cm前後の円形平面を呈するものまでさまざまである。柱穴からは掘立柱建物数棟、柵列などが予想されるが、その規模が明らかにできたものは存在しない。また、遺物の出土量が少なく、時期が不明であるが、ピット-1の柱抜き取り穴から2、3の須恵器杯身が出土しており、奈良時代の柱穴と考えられる。方形平面の柱穴は、ほぼ奈良時代頃と考えられるが円形平面の小柱穴は中世に下る可能性も考えられる。

溝は幅20～100cmを測り、深さはいずれも20cm以下である。すべて東西、あるいは南北方向を示し、掘立柱柱穴を切っている部分と切られている部分がみられ、掘立柱建物群と同時期と考えられる。性格は不明であるが、調査地が東から西へ下る傾斜面に位置していることから、雨水等の排水を考慮した溝と推定される。各溝の埋土からは、ほとんど遺物が出土しておらず、正確な時期比定は困難である。



図-49 調査区位置図



図-50 出土遺物

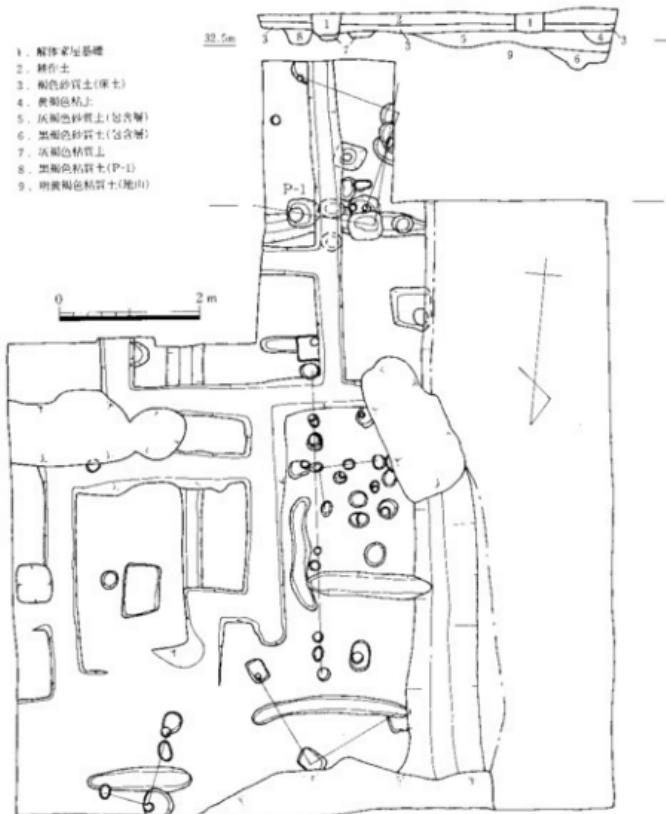


図-51 平面図・上層図

出土遺物は7～8世紀の土師器、須恵器の小片が多く、サヌカイトの剝片や原石が若干出土している。1は須恵器の杯蓋。口径15.6cmを測り、内面に短く、鈍いかえりを有する。第5層灰褐色砂質土から出土。2、3は須恵器の杯身。2は、しっかりした高台を有し、平らな底部から斜外方に直線状に口縁部がのびる。約70%が残存。3は低い高台を有する。2、3は、いずれもビットー1の柱抜き取り跡から出土。4は土師器の蓋のつまみ部分である。やや扁平な宝珠状のつまみを有し、天井部は平らになると思われる。暗橙色を呈する。表土から出土。

調査地周辺では、これまでに顕著な遺構が検出されておらず、7～8世紀の田辺遺跡の集落を考えるうえで貴重な調査となった。おそらく、調査地付近が田辺遺跡の西端に近いと予想される。

第9章 国分尼寺跡

89-1次調査

- ・調査地区所在地 柏原市国分東条町2566
- ・調査担当者 安村俊史
- ・調査期間 1989年10月19日
- ・調査面積 $4 \text{ m}^2 / 134.75 \text{ m}^2$

現地表面から約40cmで暗黄褐色粘質土に達し、溝-1～3を検出した。溝-1は幅約40cm、溝-2は幅約30cmで両溝は平行して南北に伸びている。埋土は灰色砂質土であり、少量の土師器、瓦片が出土しているが、時期は不明である。溝-3は暗灰色砂質土を埋土とし、東西へのびるようであるが、溝-2に切られており、また調査区外に続いているため、全容は不明である。

地表下約60cmで暗赤褐色砂質土の遺構面がみられ、約60cmの幅を有する南北方向の溝-4を検出した。溝内からは、土師器、須恵器、瓦の小片が出土している。また、第7層灰褐色砂質土から瓦片が多数出土している。その大半が凸面に繩叩き目を有する平瓦であり、確認できるものは、すべて一枚作りである。奈良

時代の瓦と考えられ、河内国分尼寺跡に伴う瓦であろう。土師器、須恵器も奈良時代のものであり、溝-4は奈良時代の遺構と考えられるが、国分尼寺との関連は不明である。

また、灰褐色砂質土から、小刀の柄部と思われる銅製の刀装具が出土している。銅板を曲げ、裏面で重ねたものであり、表面には留め釘部分が凸状にならんでいる。柄頭は緩やかな弧をなす。長さ6.1cm、幅3.2cm、厚さ1～1.3cmを測る。



図-52 国分尼寺跡調査位置図



図-53 調査区位置図

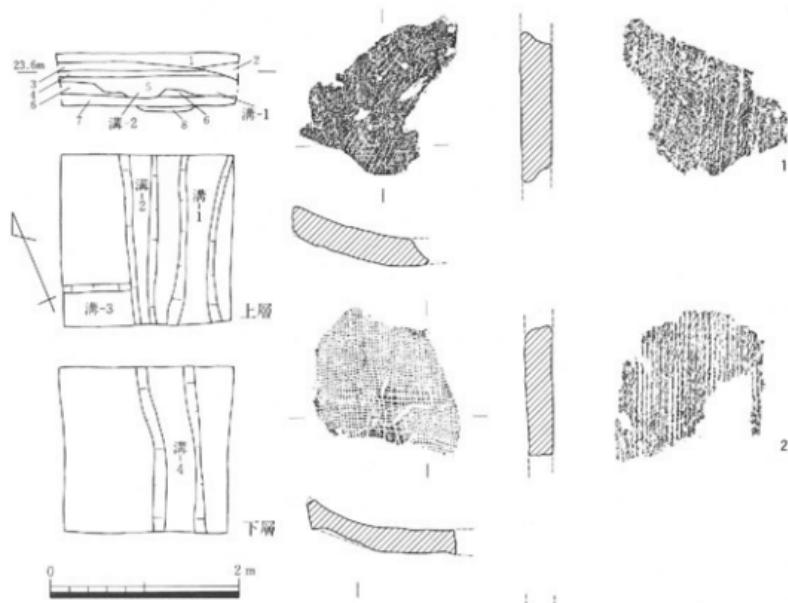


図-54 平面図・上層図

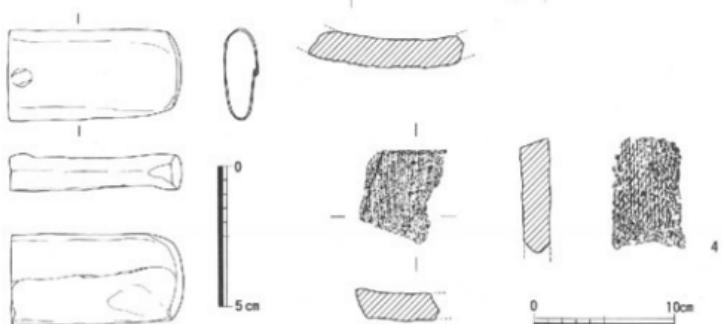


図-55 銅製品

図-56 瓦

図 版



全景



土層断面



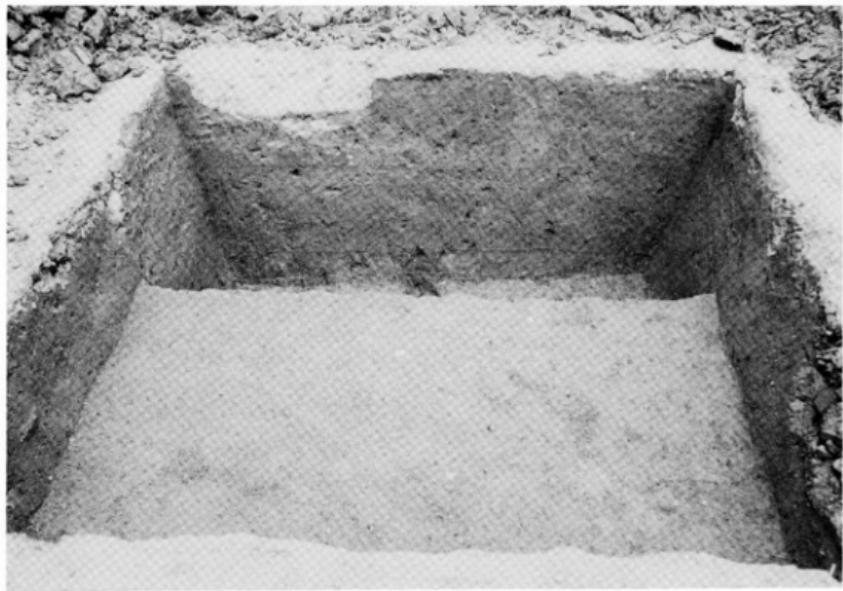
全景



遺物出土状況



全景（南から）



土層（西から）



全景（北から）



土層（東から）



旧拝殿



上層造構と本殿



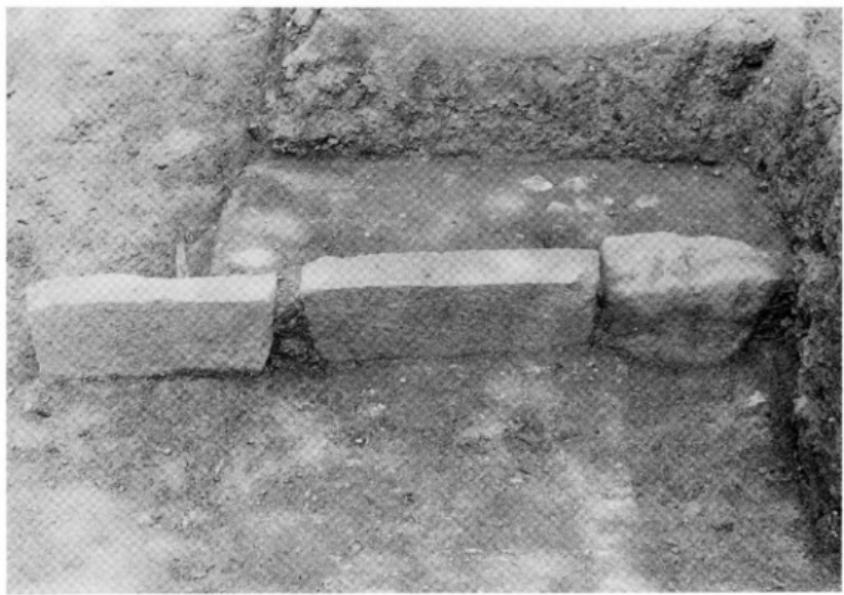
上層遺構



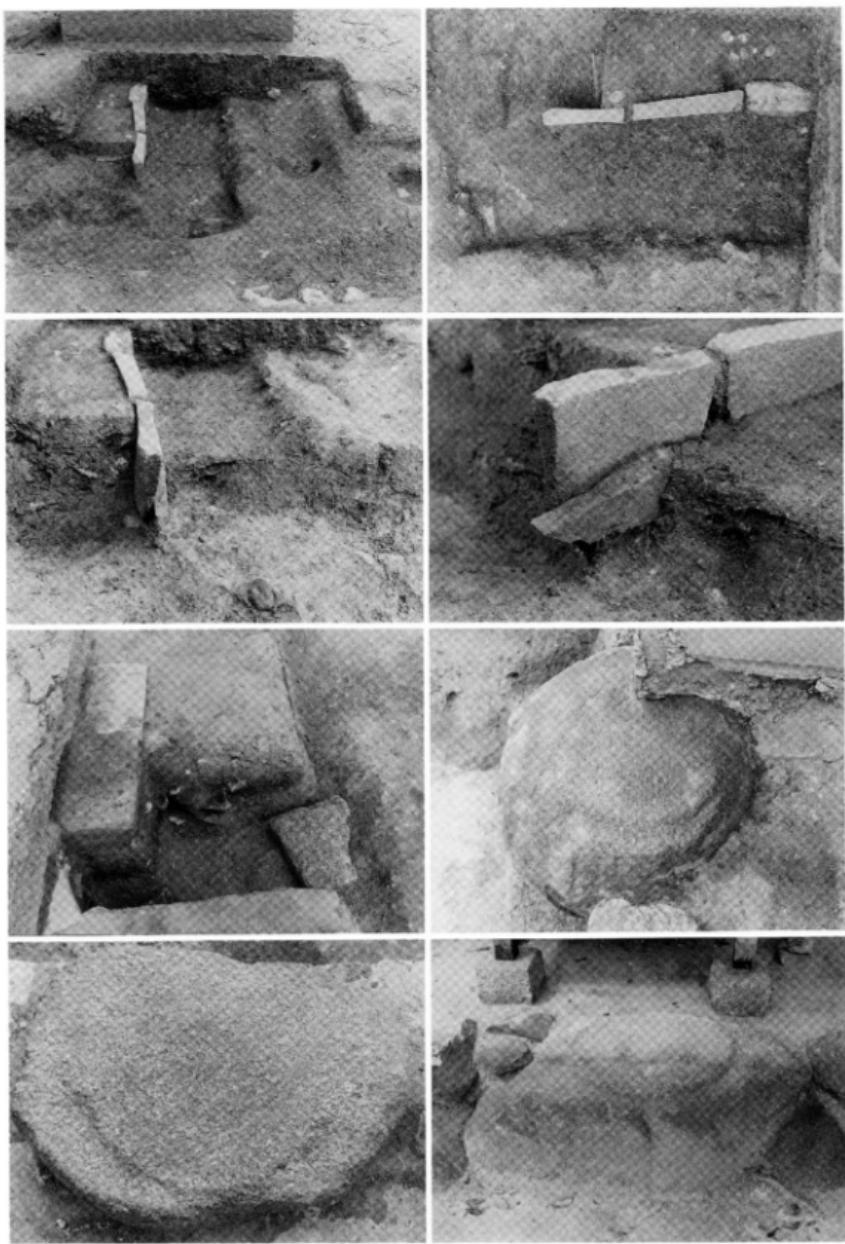
下層遺構



凝灰岩集石



塔基壇東縁雨落溝

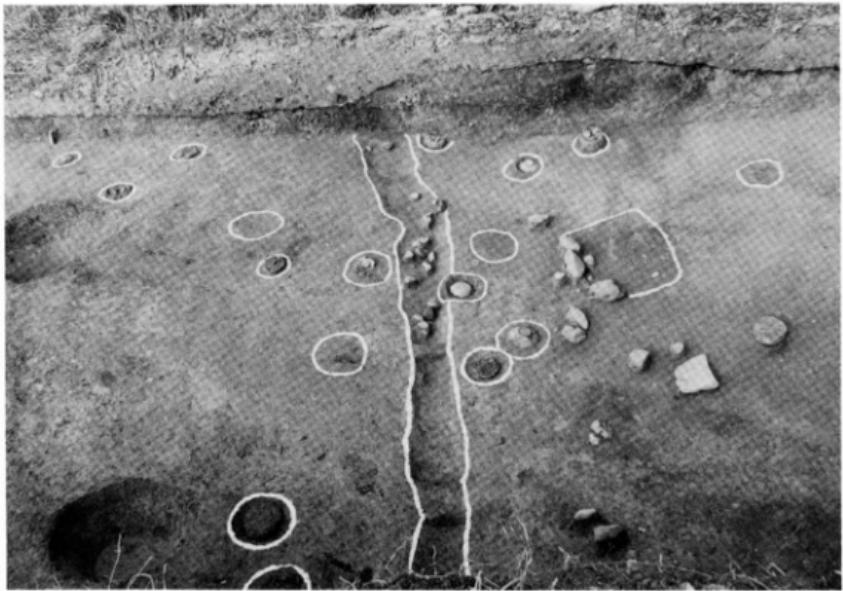


雨落溝、北側断ち割り、礎石





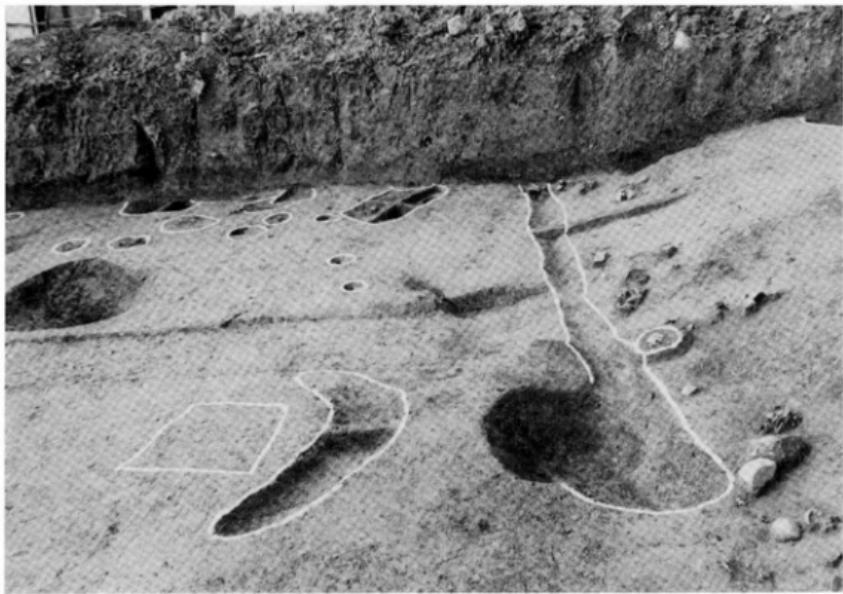
北半全景



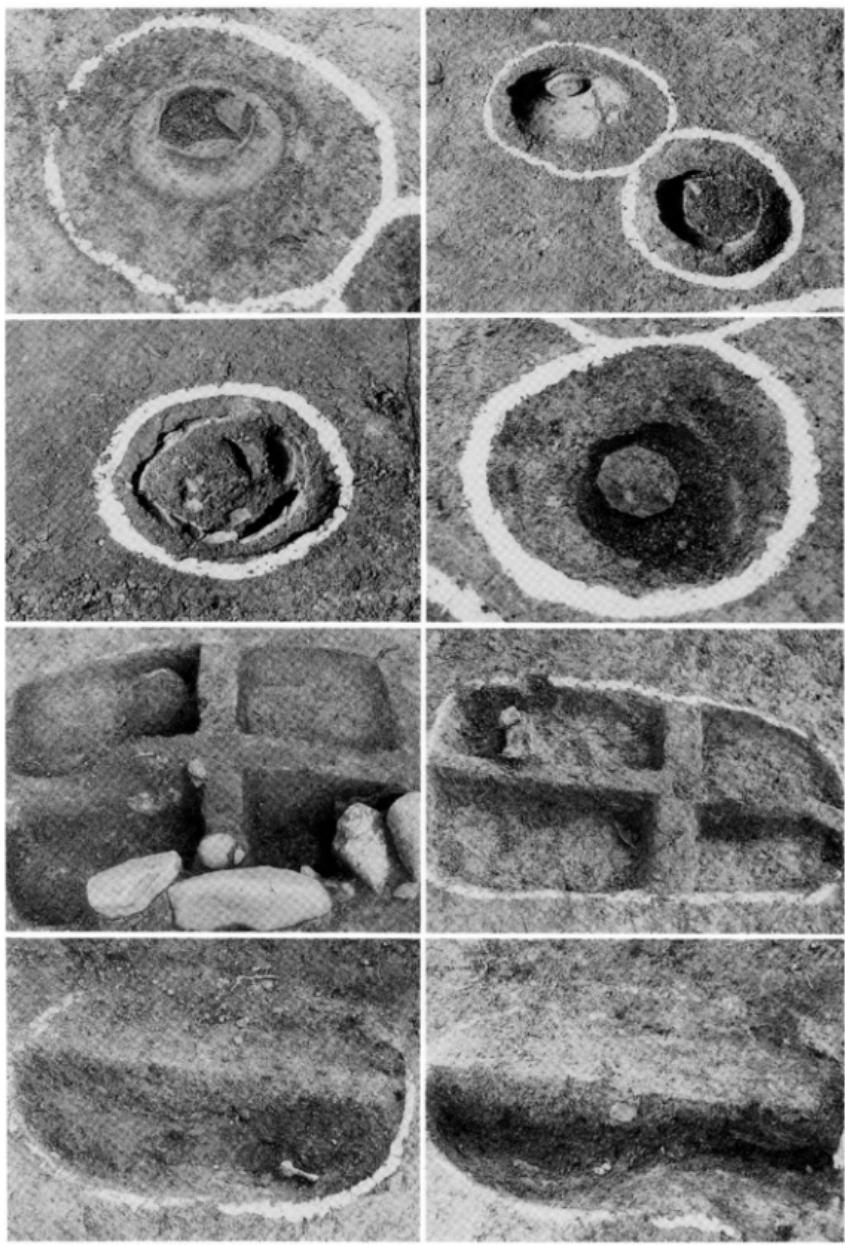
北半檢出狀況



南半全景



南半檢出狀況



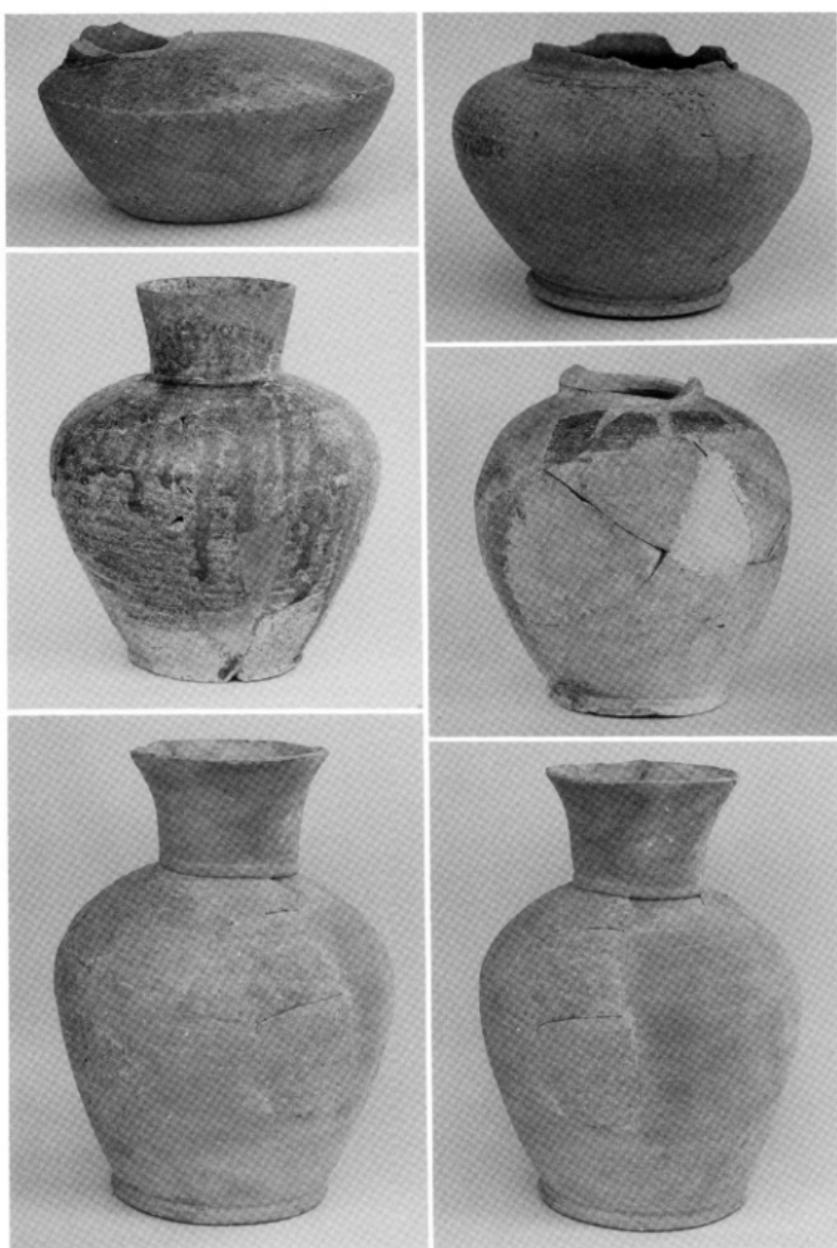


山田1号墳全景

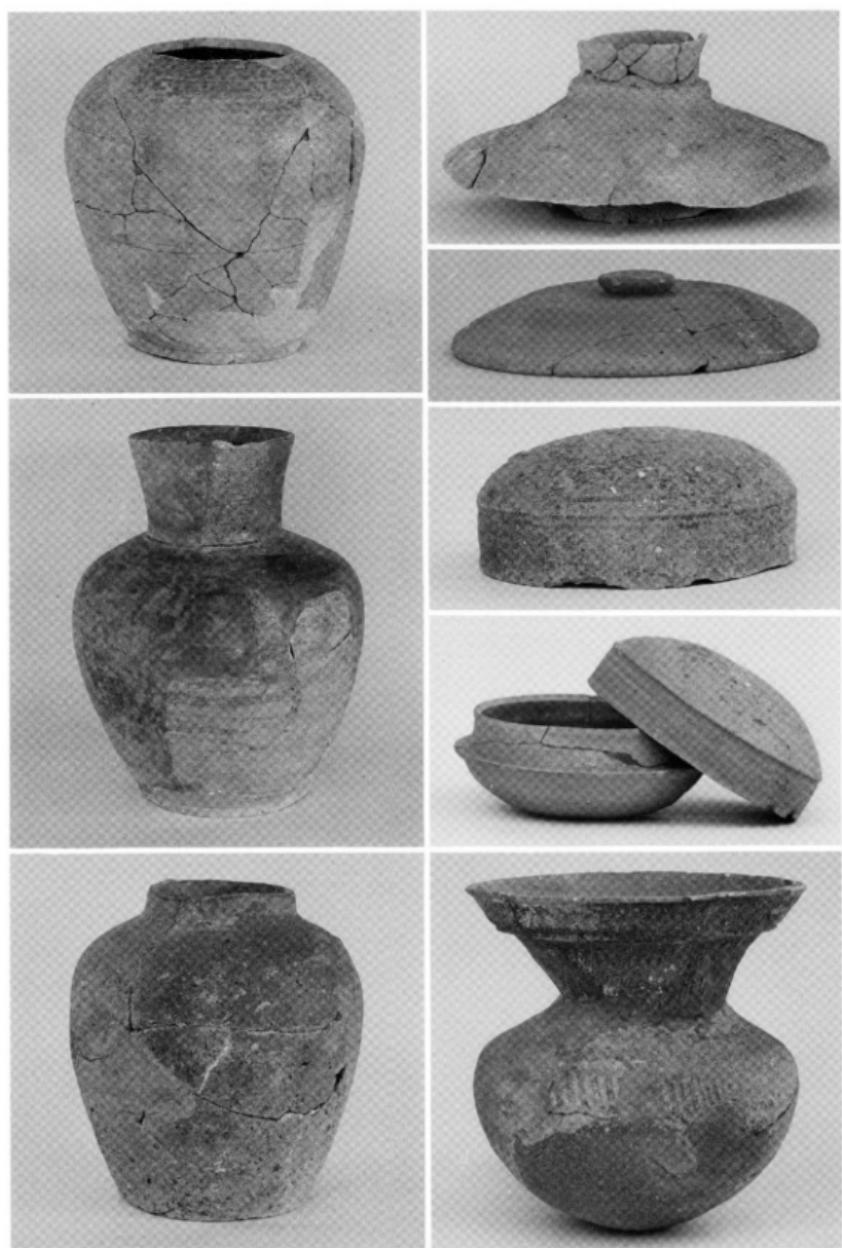


遺物出土状況

図版十四 玉手山遺跡（89—1）出土遺物

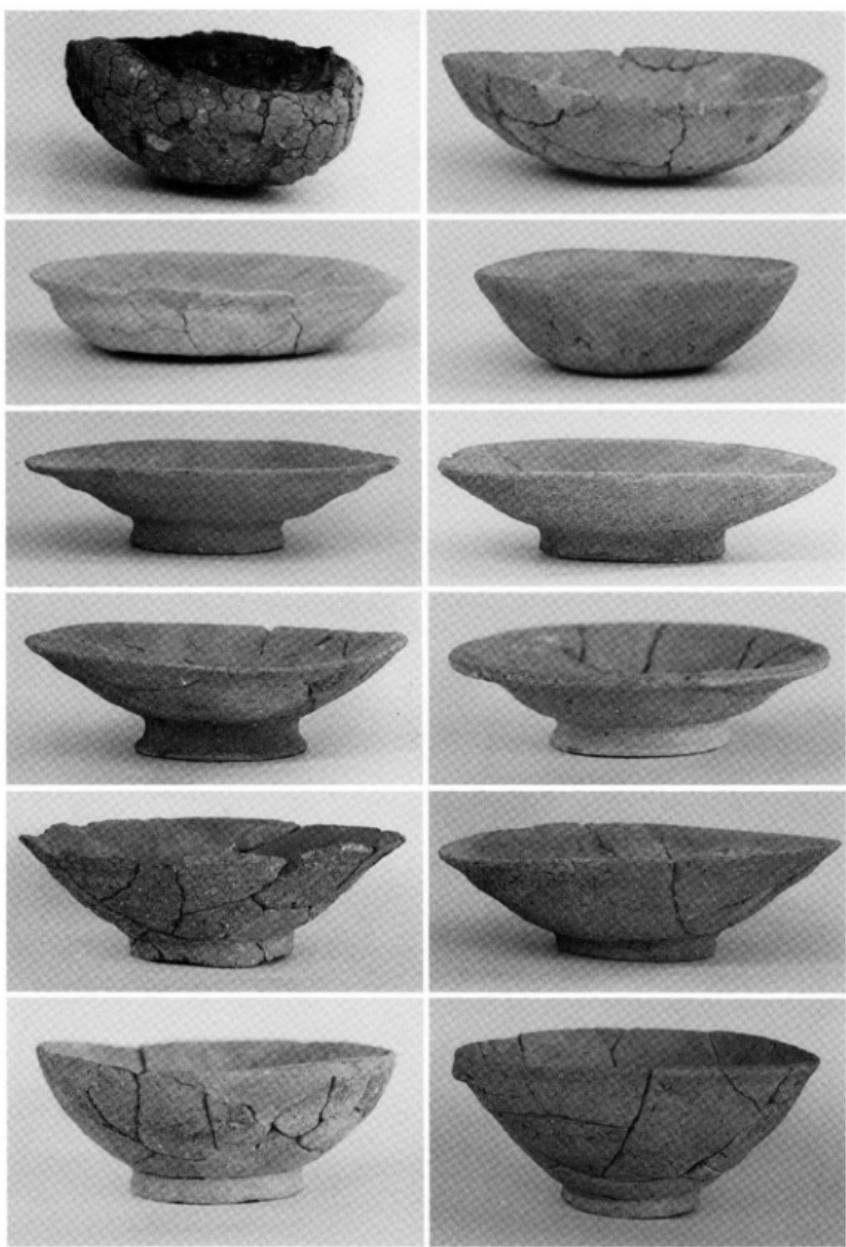


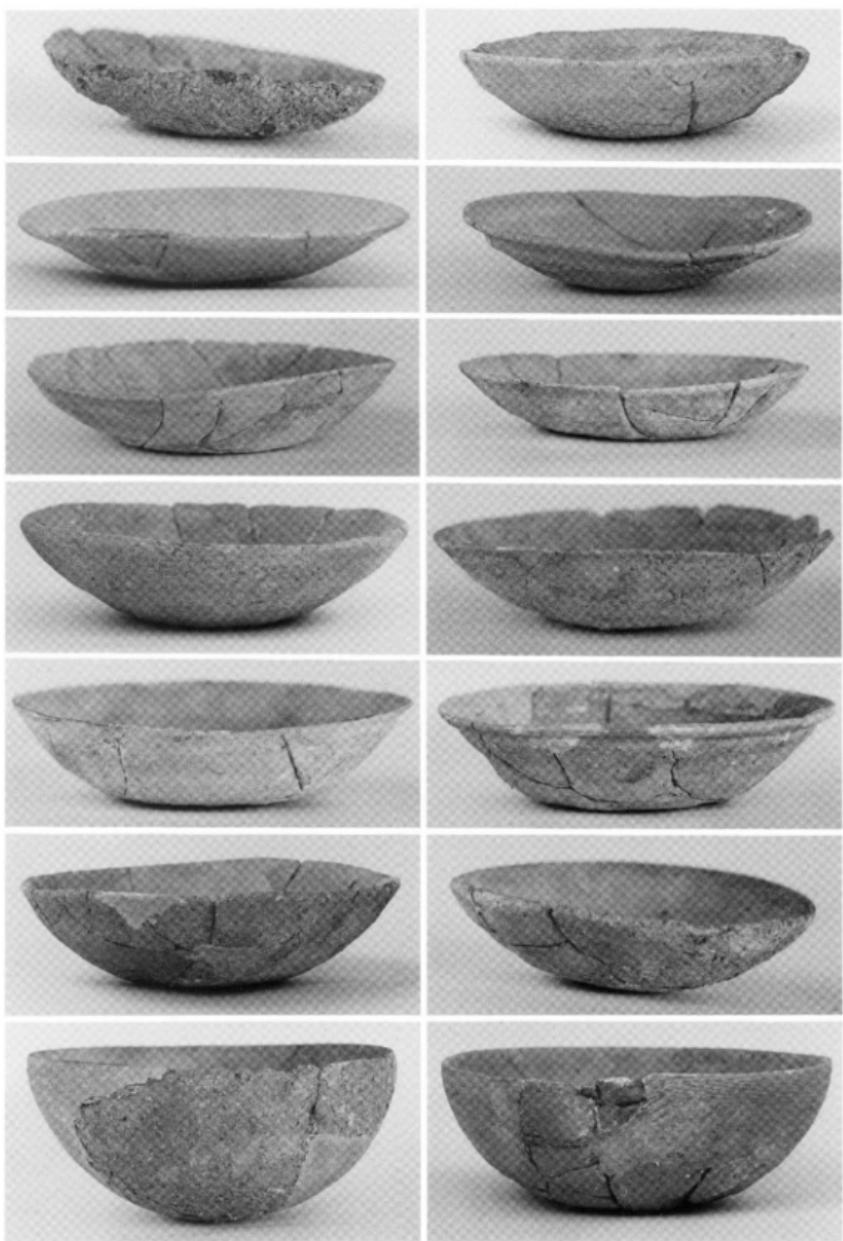
圖版十五 玉手山遺跡（89—1）出土遺物





圖版十七 玉手山遺跡（89—1）出土遺物







全景



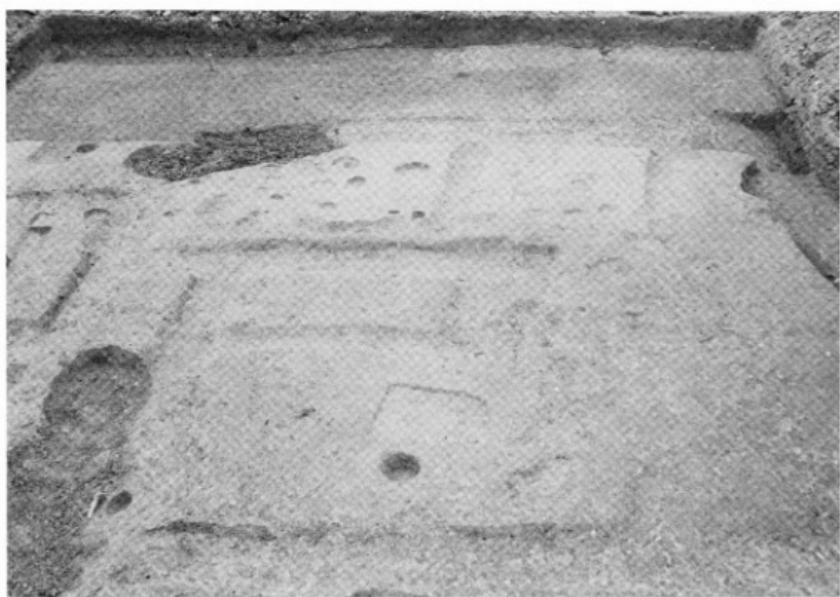
遺物出土状況



土坑-1



土坑-2



全景（東から）



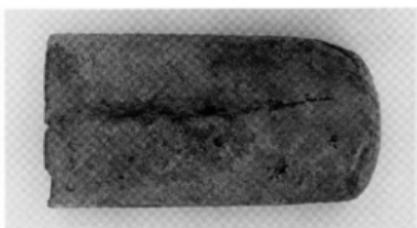
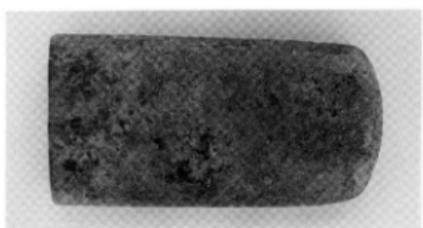
南端遺構（南から）



上層遺構（北から）



下層遺構（北から）



銅製品

柏原市埋蔵文化財発掘調査概報

1989年度

編集・発行 柏原市教育委員会

〒582 大阪府柏原市安堂町1番43号

電話 (0729) 72-1501 内5133

発行年月日 平成2年3月31日

印 刷 株式会社 中島弘文堂印刷所

